
赤羽館

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤羽館

【Nコード】

N0497X

【作者名】

有里

【あらすじ】

大学進学と共に上京して早1年、こつこつと地道に貯金をしてきた俺は、今日から念願の一人暮らしを始める。……訳ありアパートメント「赤羽館」に引っ越してきた神前丹の、非日常的日常。

始まり

大学進学と共に上京して早1年、こつこつと地道に貯金をしてきた俺は、今日から念願の一人暮らしを始める。

今まで居候させてくれた伯父さんにはとてもお世話になったが（ついでに美味しい飯を作ってくれた伯母さんにも感謝している）、とうとうこの日がやって来た。俺はこの日が楽しみで仕方なかった。

大学の友達は地元の間人もいるけれど、俺のように地方から出てきた人間も多くて、そういった学校近くのアパートや学生寮に住んでいたりで、そういう奴らはそこからなら毎朝時間的にも余裕があるし、夜飲み会で遅くなったら時は俺も泊まらせてもらうことがあった。

金銭的に余裕がない学生だから部屋は狭いし不満な点を挙げれば限は無いのだろうけど、そこは全て自分の色で埋め尽くされていて、子供の頃作って遊んだような自分だけの秘密基地のようで、その一人の空間が正直羨ましかった。だって、友達と小さなテーブル囲んで酒飲んで馬鹿騒ぎ出来るのも（今考えれば絶対近所迷惑だったけど）、やっぱり一人で暮らしていて他に気を遣う人間がないから一人暮らしなら、休みの日なんか何時に起きたって良いし、一人ならわざわざ朝飯を作って食べる必要も無いし（いや、休みの日も伯父さんや伯母さんに合わせて朝早く起きざるを得なかったことに不満はないけど別にもう終わったことだしな！）。

とにかく、全部自分の好きなように決められるんだ。その分自分で全部やらなくちゃならないんだけど、高校まで実家暮らしで、そしてつい最近まで親戚の家にはいた俺にとっては、一人暮らしはとても魅力的だったってこと。

荷物を肩に掛け直し、俺は相庭駅の改札を出た。

3月の終わりの、冷たいんだか温かいんだか分からないくらい中途半端な風がすうっと通り過ぎて行く。

俺の荷物はこのボストンバッグ一つだ。黒色でちよつと大きめで、確かこれ、中学の修学旅行で使った奴だったかな。まあ、これじゃあちよつと格好付かない気もするけれど、引越し先の部屋は家具付きで、しかもとから荷物少なかつた俺はただ衣類を持っていけば良いだけなのだから（あ、あと本業の、大学の教科書とか資料とか）、この程度で十分だった。

相庭駅は、俺が通う大学の最寄駅から二つ目の所にある。

この辺りは閑静な住宅街で、というか高級住宅街と言っても過言でないのだが、その雰囲気は上品だけれど親しみやすく、とても馴染みやすく思えた。長閑な雰囲気が、春の昼下がりを暖かく包んでいる。

一応調べて印刷しておいたこの辺りの地図を取り出し、歩き出す。でも俺がこれから暮らす「赤羽館」という建物はレンガ張りで風見鶏が立っていて、しかもそれが物凄い高い塀で囲われてるって言うから、歩いていればすぐに見付かるだろうと思われる（実は実際に物件を見るのは今日が初めてだったりする。でもここを紹介してくれた不動産屋の親父は親切で良い奴だったし、バイト三昧でそういう何件も見ると時間が無かつたのだから仕方ない）。

案の定、そう考えながらきよきよと真っ直ぐ歩いて来ると、突き当たりを左に曲がつた向こうにそれらしきものが見えた。自然と俺は小走りになって、とうとう、赤羽館のでかい門を見上げていた。立派な洋館である。しかしここからだと言門と塀と……その向こうに聳える尖塔の先に揺れる風見鶏の先つちよしか見えなかつた。

「やあ、君が神前丹くんかな？」

でかい建物（視界のほとんどが門と塀だけど）を見上げていた所
為で首が痛くなった頃、ぴったり閉ざされた門の脇にある小さな扉
（門と比べるから小さく見えるけれど、これは普通の大きさの普通の
玄関だ）から、若い男が一人出てきた。……彼は俺よりも少し年
上くらいかな、と思う。

「ここの管理人をしています、赤羽真咲です。よろしく。」

人の良さそうな笑みを浮かべながら、彼はさり気無く俺の荷物を
持つと、門を潜り、中へと案内してくれた。しかし門を通り抜け赤
羽館の敷地内に足を踏み入れた途端、俺は驚嘆の声を上げること
になる。

その重厚なレンガ造りの外観、空を突き抜けるように伸びる塔（
こう言ってはなんだが、城の屋根みたいな感じ？）、その尖塔に黒
く雄々しい風見鶏が光り輝き、右奥に見える洒落た外階段、建物を
覆うようにあちこちに聳える木々の深緑色の葉っぱたち、向こうに
見える一角は恐らくバラ園か何かのようで……。もはやこの
古風な木造3階建ての異人館は、単なるアパートとも言えない。威
厳があり、頑丈な騎士がその門を守らなくてはいけないような、ま
るで小さな城のようにとても美しいものだった。日の光を浴びて、
ますます光り輝いて見える。辺りをぐるりと囲む木々の中から、鳥
の鳴き声のようなものがあちこちから聞こえた。

その内装も見事で、玄関を入ると広い吹き抜けのホールがあつて、
正面玄関の扉の上にはその吹き抜けの一番上まで何メートルもの大
きさのステンドグラスが、様々な色合いでキラキラと外の明かりを
取り入れている。そして床には、控え目の落ち着いた色をした絨毯

が廊下に長く続いている。……——右に食堂（ここもまた、豪華な中世の城館風な造りだ。誰もがここはどこの国だ？！と絶対思う）、正面に談話室（置いてある家具がどれも高級そうで触れられやしない）、左に応接室兼書斎のようなものがある。そしてホールの中央に大きな螺旋階段があつて、それ以外にホールの左右突き当たりにも階段がついている。

2階に行けばそこはまるでホテルの廊下みたいに落ち着いた雰囲気、各部屋の焦げ茶の扉が並んでいる。壁に掛ったランプがやんわりと橙に光っていた。

「神前くん、君の部屋は……ここ、11号室だ。これが部屋の鍵。」

赤羽さんはそう言いながら、扉の繊細な装飾に似合わないごつごつとした鍵を手渡した。11号室——廊下の突き当たりで角部屋だから、きっと12号室から3階になるのだろう。一番端の階段がちょうど目の前というように近くにある部屋なので、いくつも同じ色をした扉が並ぶ中で、この自分の部屋の場合だけはすぐに覚えられると思った。

その扉の覗き穴のすぐ下辺りに一枚古びたカードが貼り付けてあったけれど（よく見ればどの部屋にも扉に一枚必ず何かのカードらしきものが付いている）、どうもそのカードは薄れてしまっていて何が描いてあるのかよく分からない。それよりも、扉の横に付いているランプの下プレートに、ローマ字で「Kanzaki」と俺の名前が入っている。それを見て、内心ひしひしと嬉しさを噛み締めながら、赤羽さんから荷物を受け取る。赤羽さんは微笑みながら、その眼鏡の奥から瞳を光らせて俺を見た。

「食堂のキッチンが共同で使えるから、君の好きな時に使ってくれていい。それが僕に一言言ってくれさえすれば、こちらで三食用意出来るからね。」

「…え、ほんとですか?!」

食事のことは初めて聞いたので、驚いてパツと赤羽さんの顔を見た俺は、彼の顔に浮かぶ笑みにつられたのと、自分で食事を用意しなくていいことを思っふにやりと口元が緩んだ。それを見た赤羽さんは口元に手を当ててクスクスと声を立てて笑う。

……あ、何か、すごい絵になる人だな。

よく見れば…俺よりも背が高いし、痩せているけれど肩とかしつかりしてるし、姿勢も良くて、知的で、しかもすごい美形じゃん（眼鏡かけていてもいいけれど、外したら外したで一層いいんじゃない?）。同じ男の俺でも、この人の前に立てば赤くなって緊張しちゃうくらい。悪友である村田や大学の女友達にも自慢したくなつたが（俺んとこの管理人さん、すげーかつこいいの。って?）、何となく、他の人には見せたくないと思った。赤羽さんは俺のものじゃないのに変なの。

赤羽さんの髪は地毛なのか、金に近い色をした茶色は柔らかく揺れて、形の良い眉はなだらかで優しい表情を作り出している。ハーフなのかな。そのグレーの瞳は——…光の加減で時折淡いブルーにも見えた。すごく、綺麗な色だ…。

「うん、ここに住んでる人はほとんど皆頼んでる。料理が苦手だったり、時間がなくて面倒だったりするなら、君の分も用意しようか? 今日の夕飯は無理だけど、明日からなら…。」

「あ、はい、お願いします!」

慌ただしくペコツと頭を下げた俺に、うんわかったよ、他に何かあったら遠慮なく聞いてくれていいからね、と優しく頷いて、赤羽さんは階段を下りて行った。

うわー、何か管理人さん良い人そうで安心した。これなら俺でも一人でやっていけそう。これからの生活を思い浮かべてにやにやと笑いながら、俺は自分の部屋へ入った。

あれだけ建物の周りを植物に覆われていれば日の光もあまり入らないんじゃないかって思ったけれど、窓から入り込む太陽の光で部屋の中は異様に明るかった。角部屋だからかな、窓が大きくて二つあるし、そのお陰でそれほど広くない部屋でも開放感がある。昼間は部屋に備え付けられた照明も必要ないくらい。俺はすぐに窓へ駆け寄って、それを開け放つ。爽やかな風が、緊張して火照った体に気持ち良く感じた。

備え付きの家具はこれまたアンティークな感じのばかりで、これを普段使うにはちよつと…と思うけれど、木の質感というか、そういうものが古いけれどしつかりしていて、とても長く大事にされていたんだろつなとか…そういうのがよく分かる。もはや芸術品と言えそうな、綺麗に磨かれた本棚や洋筆筒、デスク、こういうの、俺なんかが使っちゃっていいのかななんて思った。

そして、持って来た荷物と、明日届くであろう荷物(今日伯父さんの家からまとめて送っておいたやつ)の置き場所を考えながら、部屋の中を歩き回る。まあ部屋は一人部屋だしそれほど広くもないけれど、隅から隅まで、まるで新しい玩具をもらった子供みたいに

飽きることなく何度も観察をした。その中で驚きだつたのが、バスとトイレが分かれていること。一か月の家賃から考えてそれは無いと思つていたんだけど…。それとなんと、その白い陶器のバスタブの黄金の足は、動物の足の形をしていた。

何か西洋の家具つてかつこいいし洒落てるものが多いな（田舎者の俺には絶対似合わないが……）。照明も骨董品で高く売れそうな感じのだし。

こうして部屋を見回る度新たな発見があつて、ますます、契約時に確認したけれどあの家賃でいいのか…俺、騙されてる訳じゃないよな…と不安になる。ベッドに腰掛けてじつと頭の中で換算してみたけれど（頭の悪い俺には、脳味噌がぐるんぐるん回ってるみたい）に頭が痛くなつた）、それでもこの部屋であの家賃で、それでやっていけるの？ それとそれは別料金、こつちも別料金とか言われたら困るんだけど。でもホント、これ普通に考えても安すぎじゃない？ 伯父さん家にいた時でも親からの金銭的な援助が少なくて（残念ながら実家も俺も、どつちも辛いのだ）、全部バイトで稼いで何とか持つてきたものだけだ。だからまあ、家賃の安さが決め手でここにしたんだけどさ、落ち着いて考えてみたらこんな条件良い物件であの安さつて、大体が『訳あり』って奴じゃない？

「……………と、とりあえず、…赤羽さんここに、」

なぜか足音を立てないようこっそり立ち上がり、一度覗き穴から廊下の様子を覗き、耳を澄ませて辺りに人がいないことを確認してから部屋を出た。とりあえず管理人さんに相談しなくては…。後から請求されたって払えないって絶対。

「…あれ、いや、そもそも、あの不動産屋の親父も良い奴だったけど、こういうことに関しては結構いい加減な感じだったしな、……………」

俺も忙しくて、それほどちゃんと契約書類に目を通していなかったかも（サイテーだ！）。

今から考えてみれば……………と、ぶつぶつと独り言を零しながら何だか不安になった俺は余所見をしていたのか、ホール中央の階段へ向かう途中、くるりと曲がり角を曲がった途端誰かにぶつかった。あいたっ、と高めの声が響き渡った。

「う、うわ、…ご、ごめんッ…なさい、……………」

俺は後ろによろけただけだったけれど、相手はどうも尻餅をついてしまったようで、俺も慌ててしゃがみ込んでその顔を覗き込んだ。

「いてて…こつちそごめん、余所見して——…あ、もしかして君、新しく入った子!？」

赤茶の髪で、よく通る活発な声を上げてがばつと顔を上げた少年は（高校生くらい…かな?）、俺をまじまじと見詰め、珍しいものを見るようにうわあ〜と目を輝かせた。…う、何か凄いわくわくしてキラキラしてる……。

「は…はあ、そう…ですけど…?」

「わ〜新しい人なんて何年振りだろう!　ねえ、君も『アレ』なんでしょ?!」

ぴよこんと立ち上がってお尻の埃を払っていた少年だけど、突然思い出したようにばつと顔を向けると（彼がそうする度に乾いた色をした赤茶がばさばさと揺れる）、当然、というようにそう言った。…ア、アレ?　アレって何?

「あれ、違う?　君も、だから真咲んどこに来たんじゃないの?」

きよとんと首を傾げて、もう一度確認するように俺を見る。俺の困惑顔を見詰めてその黒い瞳が丸くなって——…うわつまさか!　と小さく囁き、驚いた風後ろによろめいた。いちいちリアク

シヨンがオーバーなんだけど。……何コイツ、ホント訳分かんない。

「あー…えっと、君、何か勘違いしてない…？ 俺、今日11号室に越してきた神前丹っていうんだけど、…」

あはは…と愛想笑いを浮かべて、困ったように頭を掻きながら言ってみれば、しかし目の前の彼の目は今度は恐ろしいものを見るようにこちらを見ていて、そして俺の名前を聞いて、うそッ！？と慌てた顔が急に青褪めた。仕舞いには、うわゝまずいよおゝ何で最初に確認しなかったんだよ僕ゝてつきり同じかと思ってたのにゝと唸りながら頭を抱える。

「……えー…と、あのゝ…大丈夫？」

愛想笑いも心なし硬くなって何だか苛々しながらも、心配するよゝに（特に心配なのはコイツの頭なんだけど…）少年の肩に手を置いた――…と思ったら、彼はまた吃驚したように奇声を上げて飛び退いて、じりじりと後退りしながら、早くここから立ち去りたそうにした。

「うわあああごめんッいやごごめんなさい！ 僕、何もやってないから！ ねえそうだよね君、…ホント、指一本触っちゃいないから！ …ね！？」

あわわと辺りに目を走らせながら（すげー拳動不審…誰かに怯えてるみたい）何だか訳分かんないことを大きく主張して（時々俺にも譲かせて）、上擦った女の子みたいな声を廊下に響かせると、少年はそれじゃ！と俺にぺこりとお辞儀してそそくさと傍を離れ、ピュウツと風が吹くようにどこかへ走って行ってしまった…。

「……………って、ハア?! 何さっきの!」

さっきの子もこの住人なのか? ……何て名前だろう、絶対関わらないようにしよ…アイツ絶対何か勘違いしてるっていうか絶対頭おかしいって。

むつとしながらも廊下を進み、1階の食堂にでも行ってみようと思っただけ階段を下りて行く。

どこのマンションやアパートにも管理人室みたいなところがある訳だから、ここに住んでいるとしても毎朝ここに通って来ているとしても、赤羽さんの私室が絶対あると思うのだ。さっきちゃんと訊いておけばよかった。つーか1階案内してもらった時に何か言ってた気がするけど、……………思い出せない。

思い出せないがとりあえず、赤羽さんに会って聞かなくちゃならないことがある。すべすべとした手摺の感触を伝いながら、螺旋階段をぐるぐる下りて行く……………螺旋階段はホールの中央にあるのだから、食堂もすぐそこだろう。食堂なら誰かしら人がいそうな気がした。

ホールは相変わらず広くて、大理石のような白い床が光を反射するので、床の表面で温かみのあるランプの橙が揺れている。高級そうだけどシンプルな柄の壁紙に、その空間にぴったりというような

絵画が飾ってあったり、そしてちよつとした壁紙の禿げ具合だったり薄れ具合でさえも、やはりどこも品が良い。

そうやって辺りを観察しながら（内心俺は場違いのように思えた。ここに住んでると言ったら、村田は何て言うだろう……似合わねーッ！）とか言ってゲラゲラ笑いそうだ）、俺は食堂の入口の所でまたこの住人に擦れ違った。宗教の決まりとかで女性は肌を晒してはいけない、というような国の女の人みたいに白いベールで頭を覆って、長いマント……のようなものを羽織っている女性だ、……体形からして多分だけど。

その女性はふつと俺に気付いてこちらに顔を向けると（ベールで丸く囲われた中に眉と目と鼻と口しかないからよく分からないけれど、きつと美人だ。どちらかと言うと浅黒い肌をしていて、東洋人に近いんじゃないか？）、だが何も言わないまま、じいつと俺を見たままだ。

「あ、あの……今日11号室に越してきた神前といいます。……」

その、よろしく願います、と軽くお辞儀をして、相手の反応を待つ時間がとても居心地悪い。

相変わらず女性は細い睫毛に囲われた黒っぽい瞳でじつと俺を見るだけで、俺の声が聞こえてないのか何なのか、気味悪いほど無表情だ。……ああもう、何なんだよ！と内心俺が痺れを切らした頃、ようやく彼女が口を開いた。

「あなたもしかして……カンザキ、マコト？」

意外なことに、彼女は俺の名前まで知っていた。

「え？ …ええ、そうです、けど。…あなたは？」

何を考えているのか分からない色をした目が、ふっと瞬き、突然弓形に笑った。

「え…？」

彼女の無表情だった顔が一瞬にして綻び、その変化に俺は驚いてぽかんと口を開けてしまった。クスクスと抑えるような笑い声が微かに響く。

「ふふ、…ふ、そう…あなたがそうなの。…」

女性は肌と似た色をした形の良い唇を綺麗に笑わせながら、私は2号室の千草よ、と言った。そしてうつすらと目を細くして妖艶に、よろしくね…可愛仔ちゃん、と笑うと、もうこちらを見ることなくすーっと床を流れるようにして階段の方向へ消えた。白いベールの裾が翻り、薄い唇の間から一瞬見えた真白い歯と血のように赤い舌が、残像のようにそこに現えてすぐに消えた。

「あは…はは、…何あの人、……」

おい村田ア、可愛仔ちゃんなんて言われちゃったよ俺……。

「うつろ……いない！……何で、どこにもいないじゃん……」

あれから食堂を書斎を、そして談話室も見回ってみたけれど、なぜだか誰もいなかった。

1階の廊下の奥にあるいくつかの部屋も、扉に鍵が掛かっている誰もいないみたいだった。

誰もいない……何か……特に一つ一つの部屋が広いのだから、一人も人間がいないと辺りは異様に静かで不気味な雰囲気だ。何も喋らないはずのソファや家具たちの中で、だけど誰かが囁き声で会話をしているような、どこから誰かに見られているような、何となく肌寒く、寂しいと感じるよりも先に奇妙な気分になる。きつとたった一人で広い屋敷に住んでいる人なんかは、こんな気分になるんじゃないだろうか。

それにいつの間にか日が沈んでいたようで（そんなに時間が経っていたのか？）、廊下の窓から見える空が薄暗く曇っていた。ごわごわと静かに蠢く雲の重なりを見上げ、ガラス窓の震えで強い風が吹いていることに気付く。カタカタカタとどこかからか、あちこちからか、微かな物音が聞こえてくる——…何だか少し怖くなってきた俺は、赤羽さんを探すのを諦めて大人しく部屋に戻ることにした。

だって、絨毯を歩く自分の足音でさえも不気味に聞こえてくるのだから不思議だ。こういう洋館で雰囲気があるから、ますます何か出そうで怖いじゃん。昔っからお化け屋敷とかそういう類は苦手だったのに……。

内心うつやゝと冷や汗をかきながら階段を上がり、だけどまた足

元を見ていたからか、目の前にいた人の気配に気付いたのは、その人の爪先を踏むか踏まないかのギリギリの所だった。

「あ、すみません。……」

ぼんやりしたまま顔を上げれば、そこには長身の男がいた。

黒いロングコートを着ていて、これまた黒い髪は肩に付くくらいに長く、先がくりと癖毛になっていて、それを後ろで一本に結っている…。その彼は目を伏せて細長い指で口に咥えた煙草を摘み、微かに横を向いてふう…と煙を吐き出す。そして俺を見ると異様に紅い目をすつと細めて、へえ…珍しいな、と感心するように呟いた。ハスキーな声が響き、この人もきつと新たな入居者が珍しいのだろうとぼんやりと思ったが、しかしその男の口から飛び出た次の言葉に、俺は違和感を通り越して果てしない恐ろしさを感じた。

「……——真咲の奴、どういう風の吹き回しだ？ この屋敷に人間を招き入れるなんて物好きな。……」

狼の群れに羊を一匹放り込むようなものじゃないか…、そうやってこちらを見る眼差しは鋭くて冷たくて突き刺さるように感じて、俺は体が固まってしまったように指一本も動かせなくなった。蛇に睨まれたカエルみたいだ！ どんくんと心臓の音が耳元で鳴っているように、なぜか、早くここから逃げなくてはいけないと思った。だけどそう思えば思うほど、ガチガチに固まってしまったみたいに足が動かない…。

そうしている内にも、男は持っていた煙草を握り締めて（ジュと

火が消えるような音と、灰色の煙が拳の中から漏れた）それを捨てると、その口元だけ笑わせながら、そつと長い指を俺の頬に伸ばした。

「んな顔するなよ……俺は小僧のそういう顔が好きでね、…」

うつとりと掠れた低音が囁いて、ひた…とひどく冷たい感触が（それは蛇にでも触った時のような）頬に添えられ、ぞぞ…ツと鳥肌が立った。男の指がくいつと顎を上を持ち上げ、俺の顔を自分の方へ向かせる。明らかに日本人ではない中性的で整った顔が、にやりと笑う。

近付いた男の紅い瞳に（よく見ればそれは鮮やかに、それこそ血のように、…）怯えた顔をした俺の姿が映り込む。耳鳴りがして頭の中がガンガンと鳴り響くようで眩暈がする。男の舌が、まるで獣が獲物を前に堪らず自身の口元を舐めるように、そして異様に白く尖った歯がちらと顔を覗かせる…。

「お前、何も知らないでここに来たのか？」

ぐつと顔を近付け、額と額がぶつかった。男の顔がぼやけて、彼の吐息がすぐそこに吹き付けられ、しかしその中でも瞳の赤色だけはくつきりと焼き付くように見えた。

と思ったら、近付いた赤色がすつと離れ、男は俺の顔を見下ろして吐息をつくように笑みを零す。だがその目は笑ってない。その顔は意地悪く歪んでいる。ギラギラと光る眼差しが、俺の体を細く鋭い針で刺すように感じられた。

「…ふ、運が悪かったな？　ここはな、かつてドラクル公の古城を改造した屋敷なのさ。…驚くだろう？　何百年も昔に…：しかもシギシヨアラから遠く離れたこの日本のど真中に、だからな――
…」

喉の内側が何かに張り付いてしまったみたいに声が出ない俺に、男は独り言のように話を続ける。

「しかし一般的に知られている歴史ほど疑わしいものはないよなあ…：…なんせ、俺達一族はまだ生きている。単なる伝説や伝承の中じやなく。…なあ、」

ふつと一瞬視線を逸らして遠くを見るような眼差しになり、ククツと肩を竦めるようにするとこちらを向き、――そうだろう…？　と俺に向かって問い掛けた。その瞬間、男の唇が俺のそれを塞いだ…。

「…ッん?!」

…ツんぎやああああ！！！！

この口が塞がれていなかったら思い切り叫んでいただろう。脳天を一撃、物凄い力で殴られたような気分だった。ああッ気持ち悪い！ 体の感覚や脳味噌はぐるぐると物凄い速さで動くのに、でも体が動かない。恥ずかしさと怒りとで、顔がカツと熱くなった。

…くちゅ、と音を立てて、男が一度唇を離す。男の綺麗な顔に、俺は目を見開いたまま、信じられない気持ちで何だか情けなくなってしまった。熱くなつた唇に一瞬冷たい空気が触れて、しかしすぐにまた唇が合わさる。ぞつとした。信じられない…知らない男に無理やりキスされた！ いつの間にか緩んだ唇を抉じ開けて、生暖かな舌がつつと歯列をなぞり、口内へ侵入する。

「んん、んんんッ！」

必死に叫ぼうとするのだが、それさえも呑み込まれていく。しかもコイツの手が俺の顎を掴み、そしていつの間にかもう一方の腕を腰に回しているのだから離れたくてもそうはいかない。体の中は熱くて堪らないのに、男の手や体が触れる部分はひやりと凍るようで…。

だが、ガクン、と後ろに倒れるようによけた俺は、それと同時に凍り付いたように動かなかつた体の感覚が戻ったのか、金縛りの解けたような状態で手当たり次第に手を動かした。

「……ん、…ふあ…ッ、く、やめ…やめろよッ…！」

ぐつと腕を突っ張って、男の肩を力いっぱい押しやった。する
と思ったよりもすんなりと男は離れる。しかし頭上で、神経を逆撫
でするような笑い声が聞こえる。俺はゼエゼエと呼吸をしながら、
怒りで真っ赤になった顔でキツと睨み付けた。

「おーおー、怖い顔しちゃって。」

「い、いったい何なんだよお前！ ……ツいきなり！ 初対面の人に
するようなことじゃねえだろ！ この変態！」

大声で叫んだつもりが、急に声を出した俺の喉は引き攣って、代
りに掠れて上擦った声が飛び出た。それでも真っ直ぐに睨み付けて
やれば、男は笑いを堪えるように肩を震わせた。その表情が俺をか
らかうようで憎たらしい。

「なっ…何笑ってやがる…！」

「ふっ、元気のいい奴は嫌いじゃないな——…そういう奴ら
に限って、中々いい味してるからな。」

「は？！」

何か不吉な言葉が聞こえた気がする。いやいや、気のせいじゃなく……。

「ッうわああ何なにに?! 何するんだッ……は、離れるよ……!」

ガキのようにぎゃーと叫びながら振り回した俺の手を簡単に避けて、男の手が俺の襟元を引っ掴み、ぐいと首元を露わにする。ひゅっと俺の喉が空気を吸い込んで呑み込むような音が鳴ったのが聞こえた。呼吸の度に喉の凹凸が動く。男が目を細めてそこを眺めた……いや、違う、その男の視線は上下に動き、頸動脈の血液の流れを見詰めている——…それに気付いた時、俺の頭の中でもう一人の俺みたいなのが嘘だろッ?! と悲鳴を上げて、またその片隅でまさかコイツ吸血鬼?! と物語のような物語じゃないような、実在するんだかしないんだか分からない存在をどこからか意識の内に引っ張り上げてきた。

「……だけど、あれ、そういえばさっきこの男、何て言っていた? ドラ……ドラクル……『ドラクル公』だって……?」

「ド、ド……——ドラキュラッ……!」

辛うじて声になった言葉が、男に噛み付かれたのと同時に空しく消えた。

ドラキュラに噛み付かれた人間って…どうなるんだっけ…？

俺これで死んじゃうのかな…ぼんやりする意識の中で、馬鹿げた疑問だけがぐるぐる回っていた。物語の中でしか存在しない筈のドラキュラがこんな身近な所にいたなんて（しかも引越し先に）、誰が聞いても信じられるもんじゃない。夢でもあり得ないって…。

どこか遠くの方で悲鳴が聞こえる——…それはなぜか近付くように、いや、俺の方がそっちの方へ近付いて行くみたいに大きく聞こえてきて、一瞬何か衝撃が走って、意識がふわりと浮上するように、俺は重い瞼を持ち上げる。すると廊下に仰向けに倒れた俺の上に人影が見え、そいつが頻りに俺の頬を叩いている。
虚ろな眼差しを向ければ、気がついた？　ねえ、大丈夫？！と心底焦ったように聞いてくる。

「……う、……頭が、痛……い………」

「…ああ、よかった…生きてる！」

少年の声が、一瞬ほつとしたように落ち着いた。

「ミツ、こいつは俺の獲物だ。何をする。」

少し不満気な男の声が聞こえる。するとすぐ、ヒィィ！　なんてこと言ってんのさあ！　と少年が叫んだ。

「そんなこと言ったら真咲に殺される！　——…レイ、この子、あの１１号室の子だよ?!」

「……………なに？」

「万が一君の血とシンクロ出来て吸血鬼化しても、それで命が助かるならばまだいいけれど、そんなの稀で、普通は君の血が強過ぎて人間なんてすぐに死んじゃうんだよ?!　そしたら真咲に何て言われるか…いやいや、そもそも少しでも手エ出した時点で……ああッ、もう『皆殺し』でも済まされないよ…!」

「なっ…まさか——…この小僧が？　嘘だろう…?」

「ホントだつてば!　……僕もてつきり女の子かと思ってたんだけどさ、彼自身が『１１号室』に越してきた、って言ったんだよう!」

きゃんきゃんと犬が鳴くように、少年の高い声がキンキン響く。

「まさか…。俺はエレナを知っている…こんな奴じゃ——…」

「もう、レイのばかあ！ そりゃ生まれ変わり死に変わり性別も変わるよ！」

あーもうッ！ 失敗したなあ…！ と男にも自分自身にも苛々したように息を吐き出す。

その少年は、意識がはつきりして起き上がろうとしている俺が少年と男とを怪訝に見ていたことによりやく気付いて（不思議どころじゃない。彼らの会話には意味不明な言葉が仰山飛び交っていた）、横にしゃがみ込んで背に腕を回すと、俺をゆっくりと丁寧に起き上がらせた。

俺は床の上に座り直して、まだ霧が掛ったかのように重く感じる頭に手をやった。痰が絡まった時みたいに喉が痞えて、口の中が気持ち悪かった。そして首を動かすと、そこをチリツと微かな痛みが走る。首の根元の方と言うか、肩に近い左側の方、その辺りにつつ…と何か液体が流れるような感覚があった。思わず首筋に手をやると、透かさず隣にいた少年がその手を遮った。

「直接触っちゃダメ。僕が手当てしとくから。」

直接触っちゃダメなんて不思議なことを言う彼を真正面から見て、あ、と思った。赤茶の髪の少年だ——…彼は昼間会った時よりも大人びた表情でそう告げた。そして真面目な顔付きで、どこからか取り出した綺麗なハンカチの先をそつと俺の首に押し当てた。少年は隣に正座をして、よく目を凝らして見るように、俺の首筋に顔

を近付けていた。俺は少年が手当しやすいように首を出来るだけ伸ばして、上を向いた。すると自然とその視界に、あの、俺に噛み付いた男の姿が入る。男はぴったりとスマートな黒いコートを着ていて、そしてその紅い眼差しが、……——サアと霧が晴れていくように、俺の脳裏に先程の出来事が蘇った。

「……あー、そのー……これはどういうことでしょうか？ ……えーつと、俺はどこか不思議の国にでも迷い込んだとでも？ ……」

吸血鬼だとか狼男だとか？ 何だかもうよく分かんないんだけど！ 男はむすつとした顔で俺と少年を見下ろしているの、居心地が悪くなった俺は堪らず、反った喉から絞り出すように皮肉った声を出す。

何しろ今日俺には、このちっぽけで拙い頭では到底理解出来ない事態ばかりが起きている。……いや、こんなこと他の誰にも理解出来やしないだろう。誰かにちゃんと1から10まで説明してもらいたい、今すぐにだ。そもそも、コイツ等はやっぱりヴァンパイアとかそういう類のものなの？ 一体何なの？ この館は変人の集まり場なの？ いくら『訳あり』物件っていつてもそれはダメでしょーよ。俺、凄いわい変な所に引っ越してきちゃったみたい、何だか分からなくて頭が混乱して、どうしようもなく泣きたくなる。

しかし俺の間の抜けたような問い掛けには何の返事もなく、すると背後から、あらあら、と実はそんなに驚いていないのに驚いた振りをしているような女性の声が聞こえた。

「まさかとは思ったけれど、レイ、あなたって本当に人の話を聞かないのね。」

呆れたような言葉に、少年が顔を上げ、マイ！と女性の名を呼んだ。

男は女性を横目に見て、ウンザリしたような表情でそつと肩を竦めただけだった。しかし、お前は知っていたのか？と疑うような目付きをする。女性はその視線を平然と受け止めて、だが、……私も、真咲さんの言う人がまさかこんな可愛い男の子だとは思っていなかったけれどね、と渋々認めた。

そういえばこの男の名前はレイ……というらしい。

そして、俺はちよつとだけ振り向いて女性の姿を確認し、彼女が千草マイという名前なのだと改めて知った。昼間食堂の入口で擦れ違った2号室の住人——…白いベールに白いマントを羽織っている彼女は不自然にマントの奥に隠した両手で、透明な液体の入った小さなガラス瓶を持っていた（持つというよりも、マントで包み込むように抱えていると言った方が正しい）。

「それよりも、…聖水を持ってきたわ。この子が例の人と分かった以上、どこかのお馬鹿さんの所為で取り返しのつかないことになる内に。」

何もかも見透かすような無表情の中にもどこか皮肉が込められていて、レイと呼ばれていた男は眉を顰めつつも、どこかのお馬鹿さんねえ……とにやにやしながら千草マイの言葉を繰り返して言った。ミツと呼ばれていた赤茶髪の少年が、礼を言いながら素手でその聖水とやらが入ったガラス瓶を受け取った。そしてその透明な液体（聖水なんて大層な呼び方だが、ただの水みたいだ）をハンカチに

染み込ませると、もう一度俺の首筋へ当てた——…一瞬、氷よりもずっと冷たいものを押し付けられて焼けるような痛みが走ったと思ったら、でもすぐにその痛みは消えて、傷も何もなくなってしまったみたいに感じた。あれ、と俺が目丸くしてミツを見た。

「……噛んではない筈だ。ミツ、直前でお前が俺を突き飛ばしたから……その時に歯が掠って少し切れたただけだろう。」

相変わらず無愛想な顔で様子を眺めていたレイが興味無さそうに言う。その言葉に、ミツは一度ハンカチを外して傷のあった所を確認し、安心したように頷いた。

「そうだね、ただ傷になったただけだ。大丈夫そう。良かったあ……。」

「……そう、それじゃあ『皆殺し』からは助かるようね。それは良かったわ。」

ミツが心底ほっとしたように言って、千草マイが抑揚のない声で不吉な言葉を無関心にさらりと続けた。……しかし、次に俺達4人の背後から地を這うように響いた声に、俺は底冷えするように感じ、他の3人は笑みを浮かべていた口元をヒクヒクときこちなく震わせて、突然石になったかのようにギシリと緊張した。辺りの空気が一瞬にして氷点下になったようだった。

「そうか……残念だな、『皆殺し』はナシってわけか？」

ふつと鼻の先でせせら笑うような、冷めた低い声……。

隣の俺を通り越し千草マイを通り越し、そこに立っている人物を凝視して動けなくなってしまったミツが、震える両手を胸の前で握り締めた。千草マイは、ここで振り返らないまま消えてしまいたいと願うような表情で、しかし逆らうことは出来ないとそつと振り返る。ミツの斜め後ろに立っていたレイは組んでいた腕をぶらりと解いて手の平を上に向けると、降参というような仕草をした。しかしすぐにその表情を引き締め、すつと音もなくそこに片膝をついて頭を垂れた。まるで主に跪くようだ……。

「ヴラド公——……知らぬこととは言えこのようなこと、赦されるものではありません。しかし、この者共は単にここに居合わせただけで、……」

レイの低く掠れた声が、しっかりとした口調で紡がれる（この者共、というのはミツや千草マイのことだろう）。レイの俯いた表情は確認出来ないが、閉ざした瞼が小さく震えていた。飄々とふざけたように笑うレイの態度をこんなに変えてしまうとは——……俺はちら、と3人が恐れる人物をこの目で見た。

その人物は流れるような仕草で眼鏡を外し、くいつと眉を持ち上げると、血のように紅く輝く瞳を見せた。

「……ふん、お前は人の話を聞かな過ぎる。俺は、その名で呼ぶな

と言ったはずだが？」

赤羽真咲が、冷たい表情でレイを見据えている――……。俺は何だか分からない内にショックを受けていた。昼間見たあの穏やかで爽やかな赤羽さんが、想像出来ないくらい、別人と思うくらい……。

真紅の瞳を細めて見る赤羽さんに、レイは微かに顔を上げた。器用に片方眉を持ち上げて、……。確かに、そう口の中で呟いてすくつとその場に立ち上がる。そして何か考えるようにぼりぼりと頭を掻き回すと、先からは一転、俺やミツたちに対するような話し方で、カズィクル・ベイはエレナ嬢に御執心のようですからねえ……、と小さくにやりと嫌味じゃない笑みを浮かべた。

それを聞いた途端、ミツは地獄に突き落とされたように感じただろう。地雷を踏んだ、俺もそう思った。ピシリと凍り付いた空間に亀裂が入って、粉々に砕けてしまった感じがする。だってこの雰囲気から、そんな口利いたらやばいんじゃないかと誰もがそう思う。

しかしレイがハスキーボイスで笑った途端、逆に、重苦しくピリピリと緊張した空気が軽くなった。はっと振り返れば、赤羽さんもむっとしながらもその表情を緩めている。その顔を見て、何だか分からないけれど物凄く安心した……。それは千草マイにとってもそうだったのか、彼女は白いベールの奥でうつすらと笑みを浮かべた。

「レイ、……。お前じゃなかったら問答無用で殺っていたところだ。」

「……ふっ、生憎俺は串刺しにされても死なないけどな。まあその時は心の臓でも抜き取って完全に灰にしてくれ。」

へつと笑うレイに、赤羽さんは半眼になって呆れたように肩を竦めた。それを見たミツは息の詰まったような表情から、はあッと思いい切り息を吐き出してようやく緊張が解けたのか、疲れたようにぐったりと脱力した。

「んもゝ何だよ2人とも！　僕たちをからかうのは止してくれよ、真咲も！」

子供のようにぶくゝと頬を膨らませて唇を尖らせる。そして、本気でダメかと思ったゝと低く小さく呟いたミツに、赤羽さんは軽く笑うようにして、悪かったな、と言う。

「……俺の説明不足も否めないが、ゝだが、どうもお前たちは早合点で粗忽だ。」

「……まさか男とは思わなかったんだもの、……だから彼はただ普通にダンピールかと思った――ゝ。」

「……女だと言った覚えも無いけどな。」

ミツがうつと言葉に詰まって、赤羽さんを見る。

ミツが口を嚙み、他の誰もが口を閉ざしているので、気まずくて微妙な沈黙が訪れる。何だか俺は居た堪れない気持ちになったけれ

ど……。千草マイがちらつとこちらを横目に見た。

「……ところで、真咲さん、」

赤羽さんは笑ってはいないが、それでも纏う雰囲気は和やかに、昼間会った時のように穏やかな表情になっていた。その彼（胸ポケットに眼鏡を仕舞ったまま、ふっと瞬けば、いつの間にかさっきまで真紅に光っていた赤羽さんの瞳は淡いグレーになっていた）に、何か気にするように白いマントの千草マイが珍しく言葉を選びながら、だがズバリと今まで俺が一番訊きたかったことを代弁してくれた。

「……不本意とはいっても、こう……ここまできて、今日のことは事故みたいなものだからすっかり忘れてくれと言っても、誰も納得しないでしょう——……丹にちゃんと説明しなくても良いのですか？　いくらなんでもそれは可哀そう過ぎます。」

はっ……そうだッ！　それだそれ！　雰囲気は流されてすっかり忘れていたが、この意味不明な展開を分かりやすく俺に説明してくれ！　巻き込むだけ巻き込んで、はいさようならじゃ済まされねえ！　急にレイにキスされた時の怒りや、今まで蚊帳の外のように扱われていたことや色々なことが一気に思い起こされて、訳の分からない

い感情でいっぱいになって、俺はいきり立って勢いよく立ち上がった――と自分ではそう思ったのだが、ぐっと足に力を入れて立ち上がった瞬間、しかし俺の両脚はふにやりと曲がって、またふつと後ろに倒れるような落ちていくような感覚の中、俺の意識はふつつりと途切れた。ずっと遠くの方で、誰もが大袈裟に思うほどのミツの叫び声が聞こえた気がした……。

こうして、まるでどこか変てこな世界に迷い込んでしまったように非現実的で、奇妙で（単なる奇妙じゃない、余裕で一般人が想像するような『奇妙』を通り越している）、それでいて嘘のようにリアルティのある散々な一日が終わったのだった。

いや、これから赤羽館の、楽しいんだかそうでないんだかもう何だか分からないけれど、今までの平凡な学生生活からは確実に程遠い、新たな現実の日々が始まるのだらう。

彼女のこと

次に俺が目覚めたのは翌日の朝だった。

真っ暗闇から光が一筋こちらに差し込むように、それはとても強烈に輝きながら、瞼の裏からチラチラと何かが見える……。

俺は弾かれたようにはつと目を開けて、薄暗く深い色をした天井を見上げたまま数秒、自分が一体どこにいるのか考えるように動きを止めた。だがすぐに、ぐう…と腹が鳴る（こんな時でも体は正直である）。その音が静かな部屋の中にやけに大きく響いた。

何度か瞬きを繰り返した俺は温かなベッドに上体を起こし、ぼうつとした頭で、ここは昨日俺が越してきた11号室の部屋の中なのだとようやく気付いた。それと共に、昨夜己の身に起こった数々の出来事、そしてもう一度訊き返してしまいそうなくらい俺の常識と掛け離れた会話の数々を、全て、思い出した（残念ながら初対面で見知らぬ男にキスされたことも）。俺は咄嗟に両手で自分の犬歯を確認した。

「あ……俺、…ドラキュラに、なってる、…」

自身の首筋に触れ、ぺたぺたと頬を触り耳を触り、指先でもう一度歯列を確認するようになぞる（ドラキュラってほら、歯が牙みたいになってるイメージがあるじゃん）。そしてポツリ、間の抜けた声で呟いた。

「なってる、…うん、なってる…！」

はあっ…と深く息を吐き出し、安心しきった俺は体の力を抜いてボスンッと後ろに倒れた。柔らかくふかふかな枕に沈み込む。天井が目の前にあって、きつと窓の外からだろう…鳥の鳴き声が可愛らしく聞こえた。一瞬にして、昨日のことが何十年も昔のことのように遠退いた気がした、のだが…。

「ダンピールにはならない方がいいよ。」

誰もいないはずと思っていた部屋に突然響いた声に、ガバツと起き上がる。目を凝らせば、部屋の入口に人影が見える——…窓を覆う薄いカーテンから差し込んだ光で、彼の髪の毛が赤茶に光った。それを確認して、俺は再びぼつと吐息をついた。俺は戸惑いながらも、その名を呼んだ。

「……ミツ、それってどういうこと？」

両手で食事の乗ったトレイを持ってやって来たミツに、俺は問い掛ける。

するとミツはベッド脇の小さなテーブルにトレイを置き（そこにはパンと、温かくとても美味しそうなおいのするスープが見える）、ずっと俺に向き直った。俺はベッドにいて、ミツは傍に立っている訳だから、自然と俺はミツの小さく整った顔を見上げることになる。

「そのままさ。君はまだ人間なのだから、わざわざ中途半端な存在になることはないよ。」

ミツは相変わらず鈴の鳴るような、男としては高い声で言うけれど、表情豊かなはずの彼の顔は暗く、瞳は夜の海のように静かに見えた。

ダンピール？　そういえば昨日もこんな単語聞いた覚えが……中途半端な存在って一体……。その意味深な表情に俺は言葉が悶えた。それを知ってか知らずか、ミツはコロッと表情を変える。と何事もなかったように明るい笑顔で、だけど申し訳なさそうに眉を下げて口を開く。

「昨日はごめんよ、丹。体は大丈夫？　…ちゃんと説明するから、とりあえず軽く食べて、下に降りておいでよ？」

そう言っただけで静かに微笑んだ顔は不思議と、彼の少年らしい顔をぐんと大人にして見せた。

ミツはそのまま他に何も言わず、窓のカーテンを開けてキラキラ輝くような日の光を部屋に招き入れると、振り返ることなく部屋を出て行った。

その小さな後姿を見送り、今すぐにでも確かめたいことが沢山あったが、まずは腹ごしらえというようにミツが持って来てくれた朝食を頂いた。

案外俺って図太い神経してるかも……。こんな訳分かんない環境で訳分かんない事態に巻き込まれながら、それでも腹が減るは出され

た飯は残さず食うは。しかもこうして体の芯まで温まるようなスープを飲みながら、俺の頭は大学のことやバイトのことさえも考え出している――…今週はバイト休むって言っておいて正解だな…この状態じゃあバイトどころじゃないしなとか、しかし大学の近くにしておいてよかったな…ここから通える場所だし、これならバイト先変える必要もないしなとか、無性に大学の友人である村田に会いたいなとか（奴は、俺が上京してから初めて仲良くなった友人だ）、昨日無事着いたって伯父さん家に連絡すんの忘れてたとか色々さ。

とりあえずシャワーだけでも浴びて着替えると、空になった食器が乗ったトレイを忘れずに持ちながら、いくつも部屋があるのにひっそりとした廊下を進む。中央の螺旋階段を下りた所で、ちょうどミツが談話室の扉から出てきた。ミツは俺からトレイを受け取りながら、…丹は談話室に、と目配せした。

「――…何から話せばいいか、…正直、僕も迷ってるんだ。
…」

いきなりこんなことを言われたって信じられる訳ないって知ってるからさ、とどこか哀しげに赤羽さんは言った…。

俺は座り心地の良いソファーに緊張して硬くなつて座りながら、向いに座る赤羽さんの顔を見ることは出来ずに、ここに来てからずっと、目の前の上品なデザインのローテーブルを見詰めていた。その間、赤羽さんも何だか気まずい雰囲気の中、脚を組んだり直したりしながら、俺に言うべき言葉を探しあぐねているようだった。しかし、赤羽さんの両足が絨毯の上に落ち着き、彼はふつと静かに呼吸をして、口を開いた。

「まず…端的に言おう、」

赤羽さんのグレーの瞳が眼鏡の奥で覚悟を決めたように光り、…
――…どんな夢物語だろうと、赤羽さんの言うことを信じよう、俺もそう覚悟をして、ごくりと唾を飲み込んだ。

「レイが君に言った通り、この屋敷はかつてヴラド2世ドラクル…僕の父のことだ。…彼がワラキアで権力闘争に敗れて日本に亡命した際、身を隠すために造られたものだ。確か日本だと室町幕府の頃じゃなかったかな、今伝えられている歴史上ではね。…」

まあそれに僕がちょっと手を加えて、今はこうして使わせてもらってるのだけど、と赤羽さんは続ける。そうして出来るだけ俺に分かり易く、言葉を選びながら話す彼の表情を見詰めたまま、俺はじつと耳を傾けていた。

「……さっき権力闘争と言ったけれど、それは正確に言うと……一族の内部で起こったもので、俺達、ヴァンパイアの一族の……」

赤羽さんが微かに口を開いたまま、一瞬自身を落ち着かせるように目を伏せ、喉を震わせ、静かに呼吸を繰り返す。そしてすぐに瞼を持ち上げると真っ直ぐに俺を見て、だけど一瞬こちらを見ただけで（彼の淡いグレーの瞳がゆらりと揺れた）また視線を落としてしまふ……。

「今では信じられないかもしれないけれど……かつてはヴァンパイアも人間と共存していた頃があったんだ。一族ごとに、それぞれ異なる王国に仕えて、……でも人間にしたら、俺達の驚異的な回復能力や特異な身体能力を利用したかっただけで、結局、戦の道具に使われただけ。俺達に対する人間の扱いも酷かった。……そこで一族の中でも人間に反感を持つ者たちが国を乗っ取り、それは後に種族間、同族同士の争いに発展していく。……」

『ヴァンパイア』……それじゃあやっぱりこの人も、……だけどそう思っても、不思議と特に何も感じなかった。恐れや嫌悪感や、そう

いうものも何も。ただ俺の中で、誰かが納得するように頷いただけ。だって、覗き込めば吸い込まれそうな万華鏡みたいに綺麗な瞳や、陶器のように滑らかで美しい肌や、あの時の一瞬で凍りついてしまいうんくらいに冷たい眼差しや、……そういうものを見ていて、分かるだろう？ やっとパズルのピースが合わさったみたいに。歪んで遠い世界のように見えたものが、やっとピントが合わさったみたいに。ああ……そっか、そうだったんだ、って。もちろんこの一言で片付く訳ではないけれど、俺の常識じゃあ片付けられなかった出来事も、すっかりこれで説明がつくじゃないか——…。

俺は押し黙ったまま、赤羽さんも少しの間口を噤んでいた。しかしその沈黙も居心地の悪いものでなく、どこかひっそりと寂寥の感が漂い紛れ込んでいるものだった。

「……その頃、もちろん俺も国の内部闘争に巻き込まれて、……ある人と生き別れになってね。……いや、彼女は人間で俺はヴァンパイアの血を引くダンピール……当然、人間と吸血鬼との寿命は異なるから、死に別れになったんだって。……」

寂しい話の内容とは裏腹に、俺から視線を逸らすように横を向いた赤羽さんは微かに微笑んでいる……。

だけど、弱々しく光る瞳は何かを堪えるように瞬きを繰り返して、口元に浮かぶ儂げな笑みが自嘲的で、彼が自分を責めているのだと哀しいほどに俺には分かった。彼の笑みは美しく、だけどそれ以上に痛々しい。目を伏せれば瞳のグレーが消えて、長い睫毛がそっと影を落とす。

「その人の名はエレナ、……」

「…え、……」

ふっと、彼の顔が真っ直ぐに、懐かしそうに微笑みながら泣き出しそうな表情で俺を見た。エレナ…、そう呟くように繰り返す。

途端に俺は急に胸が悶えるような苦しみと、だけど仄かに心が温かくなるような、不思議な感覚に囚われた。急に息苦しくなつて、まるで水の中にいるみたいにただ一心に酸素を求めて、は…と息をするように口を開いたまま、引き込まれるように、俺は赤羽さんの優しげに細まったグレーの瞳から目が離せなくなった。一瞬、彼の瞳はグレーなのに、それが紅く光つたように見えた。

「とても、素敵な女性だった。……ッ…探したんだ、ずっと、今まで、」

赤羽さんの声が震える。そして彼の願うような声が、俺の心を震わせる。

「俺はこの身体に生まれ変わってから、どこかに必ず彼女がいると信じてた。だから、探し続けた。それでようやく見付けたんだ。

…」

彼は一度そこで口を噤み、唇をきつく結んでうつすらと微笑んだ。

だけどそのまま、ゆるゆると小さく首を振る。

「本当はこんなことを言うつもりはなかった……ただ一緒に時を過ごせるだけで、それなら何でも良かったんだ、……本当は。何も知らなくても、……何も知らないままで、……。」

「——ッ……赤羽さんはその女性を、……いや、……『俺』を、探して……いたんですか……？」

思わず、俺は口を開いていた。

赤羽さんは口を閉じてこちらを見詰めたまま、頷くことはなかったけれど、それでもその眼差しから、俺には彼の気持ちの手取るように分かった。彼は、赤羽真咲は、『俺』を探していた。かつてエレナと呼ばれた一人の女性、その生まれ変わりと信じられているこの『俺』を——……まさか、……そんなの、誰だつてまさかと思うだろう。

俺は、今の俺のこの状況、俺の情けない背中を後ろから眺めているような感覚で、何が何だか分からず、ふと手が震えていたことに気付く。……ああ、俺はどこか不思議の国に迷い込んだアリスの如く、よく分からない幻の世界にいるんだ。絶対そうだ。いや、でもその半分は現実っぽくて、もしかすると俺は夢と現実の狭間に落ちてしまったのか。本当なのか嘘なのか、訳の分からない情報が洪水のように流れてきて、頭の中がめちゃくちゃにパンクしそうだ。俺にはまるで知らないことばかり、つーか普通の人間なら絶対関わることはない事柄、それが我が物顔で俺の頭の中をずらずらずらと行進している。その所為か、鈍い頭痛がした。

だけどきつと、確実に、そのまさかなのだろう。

いや、でも、……ヴァンパイアの一族にワラキアの権力闘争に（絶対どこを調べても全て、知ってる歴史と噛み合わない）、…そして仕舞いに転生問題まで出てきやがったからな……！

「だけど…でも、……俺はそのエレナじゃないッ…！」

俺は俺の置かれたこの状況に眩暈を覚えながらも、反射的に口走ってしまった。

今更何を聞かされても驚かないぞ、とそんな気持ちでここにやって来た俺が、彼の話聞き出して、すぐに弱気になったんだ。言葉を口に出してから、ハッと気付く。俺は話を聞きながら、それを冷静に確かめることなく否定しかしていない…。

赤羽さんは俺を見詰めたまま穏やかな表情を変えることなく、ただ、俺の言葉に頷いた。

「分かってる……君にそれを押し付けるつもりもないし、今聞いてすぐ信じてもらおうとも思わない。ただ…、俺達のような『種族』を嫌わないでほしい…。人間を嫌っているヴァンパイアもちろんいるけれど、ここに住む者たちの全てが全て、そういう訳じゃないから。…君には、特に——……」

心の底から願うような、
その優しくも哀しげな声に、俺はもう何
も言えなかった…。

ようこそ赤羽館へ

あれから、ミツと俺は昼食をとりに食堂にやって来た。

実は俺が起きたのは昼に近い朝で、そして色々話を聞いている内に、既に時刻は13時を過ぎていた。そりゃお腹が空く訳だ……そうぼんやり思う。

確か俺は方向音痴じゃない筈だが、部屋を出ればミツが待っていてくれたようで、にこつと可愛らしい笑みでお腹空いたでしょ？と言いながら、赤羽さんの話を聞いて少し呆然としていた俺の腕を引っ張った。…ミツもヴァンパイアなのか……でもこんなに近くについて、一緒に話をしたり手を握ってみても、別に全然普通じゃん。どこがヴァンパイアだよ…真咲さんだつて、そう見えないのに。でも…やっぱり、そうなのかな。……ただ俺が直感的に知る限り、真咲さんは冗談であんなことは言わない。

「あ、もしかして君が丹ちゃん？！」

食堂の奥のカウンター越しに、緑がかった鮮やかな青い瞳でこれまた鮮やかな赤毛の若い女性が、ミツと共にやって来た俺を見て、わーい！と嬉しそうに手を叩き、その場で踊り出すのではないかと思うくらいはしゃいでる。俺がぼかん、と驚いていると、隣のミツが苦笑した。

「丹、この人がリユードジュリックだよ。毎日僕たちの食事を作ってくれる。毎食このカウンターに来れば出してくれるから。」

「ジュリアでいいわよ。その呼び名、長くて言い難いし私好きじゃないから。」

ミツの説明に、透かさず女性が付け足した。

そのジュリアという女性はにこにこしながら俺に向かって、よろしくね丹ちゃん、と快活に言っと、白い美しい手をこちらに差し出した。それを握り返し、こちらも微笑みながら頭を下げる（どうやら、この赤羽館のキッチンを取り仕切るのは彼女なのだろう。近所の元気な姉ちゃんみたいな雰囲気で、とても親しみやすい人に思えた）。そうして顔を上げるといきなりぐいっと手を引かれ（突然のことに俺は、うえ?! と変な声を出してしまった）、ジュリアの顔が突然アップになった。青い瞳がじっと観察するように光って、カウンターに上体を乗り出して綺麗な顔を近付けられた俺はドキドキと戸惑う。……誰だって美人に見詰められればそうなるだろ!

「そつかあ…男の子なんだあ……——可愛い、……この仔、私の好みだわ。……」

強烈な眼差しで俺を見ながら、ぞくりとするような赤い唇が呟いた。

へ…?! と間抜けな俺の声が驚いたようにヒュッと響く。か、可愛い…?

「だああああ! ダメッ! ジュリア、ほら、早く離れて!」

突然大きく叫びながら間に割って入ったミツが、ぶんぶん怒りながらジュリアに何か文句を言っている。それを彼女はふふーんと口笛を吹き出しそんな顔で聞き流した。

「別にいいじゃない。取って食う訳じゃあるまいし。」

「ぎゃあ！ ジュリアだったらやりかねない……！ ダメ、絶対ダメ！」

からかうようににやにやと言ったジュリアに、ミツが頭を抱えて大きな声を上げて、俺に向かつてジュリアに近付いちやダメだからねえ！ とも言った。その必死な様子を見ていたジュリアはまた何かからかってやろうかというような顔をしたが、あ！ と思い出したように向こうの調理場（まるでどっかの料理教室のように広くて様々な調理器具が見える。素人の俺でもその設備の豊富さがよく分かった。こんなキッチン、例えば料理が出来ても使うには気が引ける）に引っ込んだ。

ぎゃあぎゃあ騒がしかった食堂が、急に静まった。

「……ね、ねえ、もしかしてあの人もヴァンパイアなの？」

ドキドキしながら、俺はミツにそつと尋ねる。

ミツは調理場を睨み付けながら（それでもその顔は、きつと睨まれている人でさえ可愛いと思ってしまいうくらい迫力がない）、うん

？ と無愛想に鼻を鳴らすように訊き返す。もう一度同じことを言えば、ああ…そっか、いつものミツの表情に戻って、何か自分で納得したみたいに頷いた。

「ジュリアはダンピールだよ。日中から普通に動けるのなんて、ダンピールくらいだよ。……まあ、そうでないヴァンパイアもいるけれど。」

「ダンピール…。確かそれって……ミツもそうなの？」

「うん。簡単に言えば吸血鬼と人間の混血——……人間にもなれる、望めばヴァンパイアにもなれる中間地点にいる者たち。」

「へ、へえ……」

「……東欧に伝わる話だと、ダンピールは吸血鬼ハンターとか生れつき吸血鬼を殺す力を持っているとか言われてるけれど、そんなの全然ウソ。吸血鬼の能力も人間の能力も半分ずつ持っているから、人間よりかはその身体能力も高いけれど、………けどどちらかというと、人間に近い暮らしをしている人たちが多いかなあ…由緒ある純血の一族なんかは混血を嫌ってる奴らが多いし。それを知ってるダンピールたちは、…自分たちから進んでそういう奴らの中に入っていくなんてしないだろう？」

少し眉を寄せ、だがさつきよりかは穏やかな眼差しで、ミツは続ける。

「あ、それと、現代に生きるヴァンパイアは人間たちが勝手に想像しているような……太陽の光を浴びると灰になっちゃうとか、そういうのはほとんどなくなってる。普通は朝が弱いヴァンパイアが多いけど、この時代、ヴァンパイアであることを隠して人間社会に溶け込んで暮らしている奴も多いし、それにヴァンパイアの血を抑える薬もあるし、長い歴史の中で徐々に環境に順応してきてるんだ。」

「そっかー……あッ、じゃあ十字架とかニンニクとかは？」

「ふふっ…僕も最初はそれ試してやろうかと思ったけれど、そんなのもウソ。残念だね。」

俺の疑問にミツはクスクス笑いながら、上着の下から首に下げた十字架のペンダントを引っ張り出し、ウ、ソ、とはっきりと言った。何だかガックリきた。

「でも、うーん…そうだなあ、ヴァンパイアは身体能力が優れていて、人より何十倍も鼻が効くし目がかなり良いから、人間にとっては不思議なことだらけだね。だから、…色々な言い伝えがあるんじゃないのかな？」

軽くカルチャーショックを感じながらそこまで話していると、ジュリアがあゝら何話してんのよ？ とカウンター越しにやって来た。そしてカウンターにトレーを乗せて寄越しながら（トレーにはふわふわのオムライスとサラダが乗っている）、きつと絶対俺達の話聞いていたのだろう、……純血と信じられていたツエペシュも……実はダンピールだったとかね、と脈絡もなく独り言のように、どこか悪い顔でひっそりと笑った。

「え？ ダンピール……、ツエ……ツエペ……？」

「ジュリア、」

「……………あらあら、私はお呼びでないって？」

素早く飛んだ低く牽制するようなミツの声に、ジュリアは眉を持ち上げて肩を竦めた。

「私も話に混ぜてくれたっていいじゃない。」

俺はミツとジュリアとを交互に見遣る。ジュリアは冷やかに微笑みながら横を向き、しかしずっとミツに視線を向けた。そしてミツに向けて、笑みを浮かべていた口元を引き締めて一瞬真剣な顔をした。

「ミツちゃん、私だって同じ穴の貉。…彼には感謝しているし、立場もこの身体もまるで宙ぶらりんなダンピールが、完全な人間になりたいって思う気持ちもよく分かってるつもりよ。それを悪く言うつもりもない。」

「……ッ、分かってる。だけど、そういうことは言わない方がいい。ジュリアの言い方はそうは思えない時があるから。」

「………分かったわよ。…さっきのはほんの冗談、彼にちよつと意地悪してみたくなつたのよ。」

意味深に言葉を交わす二人は、何だか一瞬険悪な雰囲気になって、ただどふうと溜息をつきながら、ジュリアが頷き苦笑を浮かべた。そしてミツだけに向けていた視線を俺にも向けて、さ、たんとお上がり、とこちらにトレーを押し遣った。そして片付けをしてパタパタと足音を立てながら厨房から出てくると（カウンターの左の方に扉がある）、上に結っていた赤毛を解いて、食べ終わったらそこに置いておけばいいからね、と言って食堂からそそくさと出て行った。カウンター越しに見た厨房は、他に誰一人いなかった。

「……あれ、…ミツ、」

他にコックさんとかお手伝いの人みたいなの、そういう人いないの？
そう聞こうと思ったら、ミツはさっさと自分のトレーを持って振

り返ると、カウンターの前に突っ立ったままの俺に、何やってんの、
と言うような目をした。

「早く食べようよ。僕、お腹空いて仕方ないんだからさあ。」

食堂の中央に置かれた長いテーブル（一体何人用？！　まるで晚餐会をする時みたいな長いテーブルだった）の真ん中辺りで、隣同士で座ったミツにさっき言おうとしていたことを訊いてみた。するとミツはもごもごと口を動かしながら、ふえ？　と首を傾げてこちらを見る。……口の周りにオムライスのケチャップが付いている。

「あー…いや、食べてからでいい、…うん。…」

まだもぐもぐと咀嚼しつつ、それでも口を開こうとしていたミツを制して、俺はデザートとして小皿にあったイチゴを口に放り込んだ。甘酸っぱい味が広がり、隣で力チャカチャとスプーンを動かす音を聞きながら（他に人がいない上に、すぐ隣だからよく響いて聞こえる）、用意された食事をすっかり食べ終えていた俺は、やたらに広いこの赤羽館のことを考えていた。

ここの住人達は、変わっている。

単なる変人変態ならばまだ良いものを、なんと彼らは吸血鬼だというのだ（まさかそうくるとは……お釈迦様でも思っまい）。しかしこの建物の、辺りの住宅とは噛み合わない異様な雰囲気（まるで何か強力な力が働いて、厚いベールで覆い隠すような……）、それも納得のだけど。

今日聞いた話を自分の中でもう一度繰り返し思い起こして、俺は内心頭を抱えなくなった。

別にヴァンパイアだからといってどうこう言うつもりはない――

——…だつて、ミツや真咲さんは、確かにどこか人間離れた変わった雰囲気を持っているかもしれないけれど、悪い人には見えなし寧ろ良い人そうだし、一見俺と変わらない人間にしか見えないし……。レイにしろ、ただ吸血病で狂った人なだけかもしれないし……（それもそれで困ったものだが）。

だけどそう思う俺は、どこかでヴァンパイアの存在をちゃんと認めていないのかもしれない。

というかそう簡単に納得出来るとも思わないんだけどね。でも、だからといってそれを忘れて、そういう世界とはこれっきり縁を切つて違う所に引越したいのかといえ……ちよつと迷つてしまう（まず現実的に金の問題があるしな）。とにかく、もう少し気長に考えてみたら何か他に思うことがあるだろうし……自分の目で確かめてみたいと思うし……。

でもさ、文化や宗教が作り出したであろう物語や伝説の中でしか知らなかった吸血鬼がこのすぐ傍にいるなんてね……そんなこといったら、俺の今まで過ごしてきた世界が嘘のように崩れていく気がした。……今でも、目が醒めさえすればこれは夢になるのだろうとふつと思う。考えていると頭が混乱して、何が何だか分からなくなる。そういう俺の感覚は正常なのか異常なのか、今すぐ村田を呼び出して判定してもらいたいくらいだった。

「僕はさ、……15の時にここに來たんだ。」

すっかり片付いた昼食の器を睨み付けるように（別に睨んでいた訳ではないんだけど、周りからはよく目付きが悪いって言われたりする）しながら、結局は堂々巡りになってしまいう考え事をしていた俺は、え？ と隣を見る。

ミツは目の前の空になったお皿を見ながら、それでもどこか遠くを見るようにぼうつとした顔をしていた…。しかし何を思い出したのか、ふっと優しく微笑む。

「…………あれからもう7年経つけれど、僕、真咲のあんな顔見たの初めてだったよ。」

「…………えッ?!」

「だからやっぱり、君に会えて相当嬉しかったんだろぅな〜って思ったんだ。僕も、丹と会えて良かったし。…………だからさ、その、」

人間とかダンピールとかヴァンパイアとか…そういうの関係無しに、仲良くして欲しいと思うんだ、そうやってもじもとミツが照れたようにはにかみながら（誰が見ても、少年らしいその顔は可愛らしいと思うだろう。それこそ見ているこっちの方が恥ずかしくなるくらい）言ったのを、それでも俺はどこか遠くの方で聞いていた気がする。…………なぜなら、頭の中ではうんうんと唸りながらある計算に勤しんでいたからだ。確かに俺の耳が狂っていないければ、15…15+7年…てことはミツは、にじゅう…——22?!…俺より年上えええ?!

思わずテーブルに手を付いて立ち上がり、ガターンッ…と物凄い

音を立てて椅子を引っ繰り返していた。

「うわッ丹、何やってんのさあ！」

隣のミツも驚いたように、座っていた椅子からぱつと素早く飛び退いた。

俺は呆然と立ち尽くし、もう…吃驚したじゃないか…とぶつぶつ文句を言っているミツをじっと見た。ミツは俺が倒した椅子をよしよと元に戻すと、じいーっと自分を見ていた俺の顔をはたと見てはあ？ どうしたの？ というような顔で首を傾げた。

「……………あ、あのー…もしかしてもしかしくとも。ミツって、……今年で22歳…？」

再び、はあ？ というような顔を向けて、……………そうだけどそれがどうしたの？ とミツはケロリと言った。

「……………マジ？ ……」

半ば放心状態で、辛うじて零れた俺の掠れた言葉に、ミツはきょとんとした丸い目でこちらを見るだけだった。

だって、まさか、だって……………22、これで…22歳？ そんなの反則、かわいすぎるだろ…！

「……あーッ！ まさか丹、君まで僕のこと童顔って言うんだろ？！」

俺の心を読み取ったのか、ミツは憤慨したように目を吊り上げた。

「くそー！ ヴァンパイアの血はねえッ細胞の成長を抑制するんだから仕方ないんだってば！ ……だッだから真咲もレイもみんな若いだろ？！ あいつらだって本当はもつと年食ってるんだってば！ レイなんてあれで何百年生きてると思う？！ 僕だけじゃないんだよ！？」

仕方ないんだってばあ！ とまるで子供が駄々を捏ねるように、興奮してその場で足を踏み鳴らす。

俺はとうとう噴き出して、思わず宿めるように赤茶の髪にぼんと手を置いた。しかしそれがますますミツを怒らせることになるとは……。

「……ッこ、……子供扱いするなあああッ！」

まるで音楽ホールのようにミツの声が反響して、キンキンと頭に響いた。

ミツは食堂で俺が年齢について言ったことで、未だにブーブーと不貞腐れたように小言を零してる。しかし少し前を進む俺を見て、あ、と声を上げた。振り向けば、ミツは少しは機嫌が直ったようにいつもの表情で俺の傍までやって来た。

「……………丹、そっちは行っちゃダメ。」

そっち…というのは、この白い柵の向こうのことだろう。

俺はじつとその方向を見て（そっちの方もこと同じように緑の芝生が続いて、敷石が道を繋げているその先には、何か離れのような小さめの建物が見えた）、何かあるの？ と首を傾げてミツを見た。するとミツは苦笑を漏らしながら、ヒ・ミ・ツ、と言う。……だからそういう顔が可愛いんだってば。

だが、行くなと言われてはいそうですかと納得出来ますか、止められれば止められるほど止まらない人間の習性を君は知ってますか——…内心うずうずしながらも、ミツの視線が痛いので、俺は曖昧に頷いて引き返すことにした。大分日が陰って来たし、今日は大人しく戻った方が良さだろう。今度隙を見て確かめに来てやる。

「んー…じゃあそろそろ戻るか。」

携帯を取り出して時間を確認し、俺は欠伸混じりにそう言った。

談話室とテラスとの境は一面ガラス張りになっており（半分は白いレースのカーテンで閉ざされていたけれど）、ミツと俺はそこから外へ出て、今まで、どこまで続くのかと思うほど広い庭を歩き回っていた。

俺は自分の住む周辺は大体把握しておきたかったので、ぐるとこの近所を散歩した後は（平日の昼間だから、道路も閑散としていた）、赤羽館内、そしてその周りの庭を見て回っていた（ミツは俺が迷子にならないようについて来てくれた。というよりも多分、見られたくない部屋とか色々あるんだろうな）。俺達がテラスまで戻ると、テラスはたっぷりとした夕陽に染まり、あちこちに植えられた花々のいい香りに包まれていた。

……この赤羽館は広い。塀の外からは分からないが、その敷地は果てしない。

館内ももちろん（俺もまだ行ったことのない部屋が1階の奥に沢山あるっぽい）、建物と敷地を囲う塀との間が広い。つまり、普通の家では庭と言うべきところが、まるで一つの公園のようなのだ。ブランコとか設置すればますます公園だと少々期待したが、大木にぶら下げた手作りっぽい木のブランコなんかは見当たらなかった（当然だ）。だけどそういう大きな木の下で、夏の午後や秋の日に読書をしたりのんびりしたら気持ち良いだろうなと思う。

あ、あと芝生に転がって昼寝するのも良いなあ……。誰が手入れしているのか分からないけれど、黄緑色で柔らかく瑞々しい芝生は、コンクリートやアスファルトに囲まれて暮らしている人間たちにはとても新鮮だ。普段子供たちが遊ぶ児童公園みたいな所でも見ることはないだろう。……つーかどちらかというと植物園みたいな感じかもしれない。あちこちに珍しい植物も多いし、俺は全然分からないんだけど、バラの種類はそれこそバラ園が開けてしまうほどだ。

その辺りはバラの芳しい香りでいっぱいだった。

でも、…こういう雰囲気は嫌いじゃない。自然がいっぱいで、都会のど真ん中にこういう場所があるなんて思わなかった。思い切り深呼吸をしたら、花の香りや青臭い芝生のおいや、でもすっきりするような空気が気持ち良かった。

「ふう、……何か飲む？　何か入れてこようか。」

昼間ずっと歩き回って日の光を浴びていた所為か、ミツの肌はほんのり赤い、…俺ははっとした。

「ミツ、…ミツは太陽の光とか…本当に大丈夫なの？」

靴の裏の汚れを落とし、ガラスの扉から室内へ入ろうとしていたミツは、心配げに窺うように見ていた俺を振り返り、何で？　ときよとした。何で、って…。

「……ああ、確かにヴァンパイアでもダンピールでも日光に弱い人はいるからねえ。多分僕もそうみたい。…だけど夏じゃないし、まだ日差しも強い方じゃないし全然平気だよ。」

相変わらずな顔でにこつとそう言ったミツは、ガラスの扉を開け放ったまま先に談話室へ消えた。

「——あゝ丹、それをそこに置くと次僕がこれをここにやって、
チェックメイトになっちゃうよ？」

俺とミツは、談話室にあるチェス・テーブルを挟んで向かい合っていた。

先程ミツが持ってきたティーセット（…銀のそれは全体的に細かな装飾が施されていて、ポットの蓋のつまみ部分は花の蕾のような形になっている。何でこの建物にあるものは全部、俺が使うには気が引けるものばかりなんだ。手が滑って落としたらと思うと恐ろしい…。ミツは慣れているのか、無邪気にそれを扱っている。……あゝああ、ミツが俺に渡したこのティーカップだって、真咲さんのような人が使えば絵になるのに）で熱い紅茶を頂き、一息つきながら俺が壁際にあつた木製のチェス・テーブルに興味を示したのが始まりだった。

一見それは八角形のごく普通のテーブルで、まるでその真ん中にチェスボードを持って来て張り付けたみたいに、真ん中のその部分は柔らかな木の茶色の濃淡でマス目が作られていた。どうも、テーブルの表面にじかにマス目が彫られているようだった。チェスなんてやったことないし見たこともないからよく分からないのだけれど。……それを俺が相当興味深そうに見ていたのか、ふっとミツが立ち上がり、近くの戸棚の中を漁って箱にまとめて仕舞ってあつた駒を出して来て、やってみようよと言った。そして、ミツもあまりやったことがないと言いながらも、チェスのルールやそれぞれの駒の動きなどを簡単に説明をしてくれた。うーん、将棋に似ているようなそうでないような…。

「うえッ…？ チェックメイトになっちゃうって…じゃ、じゃあこっち…？」

「丹、その駒はそこには動かせないよ。」

「……む、じゃあこっち？」

「うーん……まあこの状態じゃあ、そこしかないかなあ……。」

うおーッ！ と頭を抱えて奇声を上げてしまいそうなくらい、俺は混乱している。

向かいに座るミツの可愛い笑みも、どうする？ と首を傾げた悪魔のような笑みに見える…。悔しい俺はチェス盤に視線を戻して、うぐぐ…と唸る。しかし生まれてこのかたチェスなんてやったことのない一般人に、恐らく上級者であろうミツの相手は出来まい膝の上で握り締めた手の平がじつとりと汗で湿ってくるのが分かった。ああ、頭の中がこんがらがりそうだ！ これ以上考えていたら俺の脳味噌爆発する…！

「うう…リザイン。俺狂っちゃいそう…も、ダメ…。」

俺はがくりと頂垂れて、自分のキングを倒して投了した。ええ、

？ とミツがちょっと残念そうに言う。

しかし残念ながらこの俺に、頭脳を酷使用するゲームは不向きだ。ばばぬきとか、トランプみたいな気軽に出来る奴でないと――

…そう考えていると、背後でクスツと震えるような笑みが聞こえた。俺の肩越しに腕を伸ばして、その誰かの細長い指は俺が倒したキングを立て直す。

「まだ諦めるのは早いんじゃないかな、」

はっと顔だけ振り向けば、真咲さんが面白そうにすっと目を細めてチェスボードを見詰めている。い、いつの間に…！ ミツも俺同様目を丸くして驚いていた（扉が開く音も足音も何も気付かなかった……というよりも、不思議と、不意にそこに現れたみたいに感じた）。しかし真咲さんは俺達二人の視線を気にすることもなくミツの駒と俺の駒の位置を、そのグレーの瞳が一つ一つ確認するように追った。そして俺が座る椅子の背凭れに片手をつく、俺の耳元で、そこにあるクイーンを――…と囁いた。

その低音と思った以上に感じた気配に、思わずびく、と背筋を伸ばす。ちらつと横を盗み見れば、真咲さんは淡々とした普段と変わらない様子で（と言っても俺がこの人と初めて会ったのが昨日のことなのだから、普段と変わらないなんて分らないけどさ）、でも俺は真咲さんの言った『エレナ』の話とその時のこの人の表情を思い出して、この人に対してどういった顔をすればいいのかわからなくなっていた。

…何だか恥ずかしい。とにかく何だか分からないけれど恥ずかしい。

だけど真咲さんの伏し目がちの眼差しはただじっとチェス盤を見

詰めていて、彼がこのチェスゲームに乗り気であることに気付く。
…膝の上に置いたままだった腕を持ち上げて、汗を掻いた手で微かに震えながら言われた通りの所へクイーンを動かした。

ミツがうへえ〜と嫌そうな顔をする。

「真咲が相手じゃ勝てる訳ないじゃんかあ。」

助っ人反対〜、とミツが唇を尖らせて言った。でもそう言いながらもミツは駒を動かす。

「いいじゃないか、ミツ。僕もチェスなんて久方振りなんだし。」

真咲さんは優雅に微笑みながら、しかし確実に、ミツのキングを追い詰めていった。俺は石のように座って動かないまま、後ろに立ったままチェスを動かす真咲さんの指先を見詰めていた。

その大きな手はごつごつとしたものでなく滑らかで、思わず触れてみたくなるような白い肌で、繊細な指先の爪はほんのりと色が付いていて、……——いやいや、俺が見ているのはその指が動かし駒の動きであって真咲さんの綺麗な手じゃくて、…そ、そうそう、素人の俺が見ても分かるくらい、その駒の動きは完璧で間違いないように思えた。

「そういえば、……君宛に荷物が届いてるんだ。ホールの隅にあるから、後で確認してみてくれないかな？」

真咲の薄情者おくと弱々しい声で嘆くミツを尻目に（既にチエスの勝負はついていた）、真咲さんの顔がふつとこちらを見る。背凭れに手を付いている所為かその顔は少し見上げた所にあつて、柔らかな茶色の前髪がはらりと無造作に掛かっているのを、真咲さんは少し邪魔そうに横に払った。

「あ……はい、……——あ、あれ中身全部本とかだったんで……重くなかったですか？」

大きめのダンボールに詰め込んだのはほとんどが教科書やゼミで使う資料や文献などで、予想以上に重くなってしまい、俺でもこれはヤバいと思うくらいだった（持ち上げる際、主に腰が……。うう、運動不足の体にはキツイんだぜ……。しかし真咲さんは、あー……。多少重くても僕は大丈夫だよ、と曖昧な顔で頷いた。

「俺なんか後で持ち上げてみて、入れ過ぎたって後悔したのに……」

俺にとっては多少どころじゃなく重かったのだ。腕がもぎれそう

なくらい。

真咲さんの華奢な体をじろつと上から下まで羨ましそうに見ながらそう言えば、俺の視界の片隅でミツがぶふつと噴き出した。なんだよ？ と訝しげに見てやれば、ミツは口元に手を当てて少し抑え気味にくすりと笑う。そしてほうつと吐息をつくように、言った。

「やっぱり僕、丹のこと好きだなあ。癒されるっていうか……丹、面白いんだもの。気に入っちゃった！」

玄関ホールの隅に見覚えのある茶色の箱がある。明らかに俺の荷物だ。

足で蹴るようにして動かせば、こいつは変わらず重かった。はあ、と溜息をつき、そこにしゃがみ込んで箱の下にくつと指を差し入れる。そのままふーつと深呼吸をして持ち上げようとした時、膝に手をついて後ろから覗き込んでいたミツが、手伝おうか？ と言った。

「んにゃ、大丈夫……多分ね、」

俺は表情を引き攣らせながらも、気を引き締めてよつと力を入れた。うわ、やっぱり重い……。螺旋階段を何段か上った所で、俺の顔があつという間にへにやりと情けないものになった。それを見兼ねてか、ミツはくすくすと遠慮なく笑いながらも、そつとダンボールの下に、箱を押し上げるように片手を添えた。

「…………あれッ？」

ダンボールが軽くなった…。目を丸くして階段の途中でふと立ち止まった俺に、ミツはふふふと笑みを深め、ほら、早く上っちゃおうよ、とだけ言つて2階を見上げた。しかし2階に上がつて廊下を進んでいると、ミツは何かに気付いたようにあ、と口を開けて立ち止まる。

「電話鳴つてる…………——あつ、僕また携帯部屋に置きっ放しにしてた?!」

あつと叫んでぱつと手を離す。腕の中のダンボールがぐんつと一気に重たくなった。

「だあああッミツ、急に手え離さないで…!」

「うわああごめん! でもちよつと…! ごめん丹あ!」

ミツはこつちを見ることなくそう言つてタツと小走りに引き返すと、さつき通り過ぎた8号室のドアノブを握った。そして焦げ茶の扉を開けた途端、その隙間から、ピリリリと電話の呼び出し音が俺の方にも微かだが聞こえてきた。ただ扉を開けてこの近い距離だから聞こえるのであつて、ドアを閉め切つていた状態で聞き取れることは困難だ。扉に耳を押し付けて聞こうとするならまだしも――

……。プツリと電子音が途切れ、ミツの話し声が小さく聞こえる。開けっ放しになつていた扉がパタン…と自然と閉まつた。これではもう完全に部屋の中の音は聞こえない。

俺は抱えていたダンボールをよいしょと持ち直して（その時ようやく、ミツがダンピールで人間離れた力を持っていることに気付いた）、ヴァンパイアやダンピールの聴力に感心しながら、何とか一人で一番奥の自分の部屋に辿り着いた。

忠告

軽く握り締めた拳でコーンコーンコーンと暢気にノックするよう
な――……。だがそれが少しすると、ただただドンツドンツと拳
を扉に押し付けるようなものになる。

「丹ちゃん？」

もう一度トントントンツと扉が小さく震える。

「おい、丹ちゃん？」

ドアの隙間から呼び掛けるような声。

一瞬、伯母さんが俺を起こしに来た声かと思ったが、今俺がいる
のは親戚の家の布団の中でなくふかふかのベッドの中だ。時間を確
認するためにサイドテーブルに置いてある携帯に手を伸ばして引き
寄せ、薄暗い部屋にパッと携帯画面の強烈な明かりがついて、横に
なったまま眩しげに目を細めて見れば、……。

「起きなさいい！……。まったく、これだけ私が呼んでいるっていう
のに……。あ？アンタじゃないわよ、私は丹ちゃんに用があるの。
うっさいわねえ！そんな大きな声出さないでよね！」

……遠くの方に吠えるように、彼女は何だか途轍もなく理不尽なことを言っているような気がするのだが、半分以上がまだ眠っているような頭の中にガンガンと鳴り響く物音に耐え切れず（加えて他の住人との言い合いをこれ以上悪化させてはならない）、俺はよろりと立ち上がり、床の上に漂う冷えた空気に震えながら扉のドアノブに手を掛けた。小さくドアを開ける。

「あー……ジュリア、……こんな時間に何の用でしょうか……？」

現在——……午前5時ちょっと前。

赤羽館に越してきて数日……。信じられない出来事に巻き込まれたものだが、大学もまだ休みだし、特に早い時間に用事の無い休日に、まさかこんな時間から叩き起こされるとは思ってもみなかった。

意外に薄暗く寝起きの目には優しい灯りが点いている廊下に、俺の弱々しい声がそろそろと窺うように響く。たつぷりとした赤毛を靡かせて、どこか違う方向を睨んでいたジュリアがこちらを向いた。ふっと俺を見て、あら、と表情を和らげる。

「おはよう。さ、丹ちゃん、こっち来るのよ。」

につこり、そう効果音が付きそうなくらいな笑みを浮かべて、早過ぎる朝の挨拶（まだまだ夜が明けきらないのに）を簡単に済ませると、ジュリアはいつの間にか俺の手首をがっしりと掴んでいて、それはそれは物凄い力でぐいと引っ張った。

「でえッ?! …… ちょ、何、何なの?!」

「このくらいの時間じゃないと、落ち着いて話せないのよ。」

ジュリアがそつと顔を近付けて面倒そうに言いながら、何かを警戒するように辺りに目を走らせる。その眼差しは鋭く廊下の端から端までを見渡した。

そうしている内に、俺は引つ張られて廊下へ踏み出した自分の足を見下ろして、踵が潰れて縋れたスニーカーを引つ掛けたままの素足、そして高校時代の臍脂色のジャージと部屋着のＴシャツという出で立ちを思い出して、ドアの後ろに引つ込んだ。手首を掴んだままのジュリアの腕が、俺が無理やり閉めようとしたドアの隙間で叩いた。

「ちょっと、何ぐずぐずしてるのよ。」

「待つて、とにかくちょっと待つてよ、俺起きたばっかだし、」

「いいじゃない寝間着のままでも。誰も見ちゃいないわよ。」

そつという問題じゃないだろッ……!

だがジュリアは女性とは思えないほどの力でドアを開け放ち（ま、ダンピールだからね）、内心ヒィイと叫び声を上げる俺を、有無を言わず連れ出した。

薄暗い廊下には相変わらず人がない。

だけどこの間の、昼間に感じたような不気味に閑散としたものはなかった。真夜中町を歩いているように、ただ照明に照らされて無感動な影が落ちるように、でも確かに先程まで誰かがそこにいたような、そんな余韻のようなものが残っている不思議な感じがした。

何とか簡単に身支度をしたかった俺だが、肌寒さにパーカーを羽織って、結局下はジャージのままだった。ジュリアのあの強引さといったらもう、一度捕まったら絶対に逃れられないような気がする……。心なしげっそりとした俺を横目に見て、ジュリアが口を開く。

「純血のヴァンパイアたちにとっては大体…夕方日が沈んでから、夜明けまでが一番活動しやすい時間帯なの。基本的には人間やダンピールとは逆の生活ってわけね。だからこそも、そういう時間のサイクルがあるわ。夜寝ちゃう丹ちゃんには気にしなくてもいいけれど、もし気になるなら起きてるといいわ。真咲がいる時に限るけど。」

そうして俺達が螺旋階段を下りた所で、ちょうど玄関から入って来た青年がいた。軋んだ音を立てて開いた扉の隙間から見えた外はまだまだ暗く、辺りを囲む木々が鬱蒼と見え、まだ眠気が残っている俺は頭を振り、冷たい空気を深く吸い込んだ。

トンツ…と外から帰って靴の裏についた土を落とした彼は、ジーンズとTシャツというラフな格好で（それでもそのスマートな体にはぴったり合っている）ポケットに両手をつっ込んだまま、ふわああと隠すことなく大きな欠伸を漏らす。そして立ち止まり、俯いて

ちよいちよいと綺麗な金髪の頭を掻き毟って、はあと吐息をついて目を上げた。その顔を、ジュリアと食堂の方へ向かいながらちらと見て、大学でもこれほど格好良い人間は見たことないな……なんて俺は感嘆するようにぼけつと口を開けた。外国人のモデルみたい。多分彼もこの住人だろう。

大体俺と同じ年くらい、それよりももっと若いかもしれない風に見える（……あとで気付いたけど、彼が俺と同じ人間だったらの話だなそれは。……つか、ヴァンパイアって男も女もすごい綺麗な人が多い気がするんだけど何で？）。長い睫毛に囲われた彼の瞳の色は澄んだ空色で、宝石のように真つ青に光っている。その彼が何だか疲れたようなしょんぼりしたような表情を、前を横切るジュリアを見付けてぱつと変えた。人懐こい顔がジュリアに呼び掛ける。

「ねえ、真咲、どこにいるか知ってる？」

「……………あんたさあ、いい加減諦めなさいよ。部屋に行っていないかったんなら私も知らないわよ。」

唐突な勢い込むような問い掛けに、ジュリアは半ば鬱陶しげに一瞥をくれてやりながら気の無い返事をする。そのまま俺を引つ張って歩き出すが、何を思ったかふと立ち止まって俺に向き直り、くつと片手を上げて、あれが0号室のエドアルドよ、と面倒臭そうに青年を親指で指差した。0号室……普通のアパートやマンションでは無さそうな部屋の番号だが、思い出してみればこの赤羽館は全体で22部屋あると聞いている。俺の11号室が角部屋で、2階に12部屋3階に10部屋ということは、簡単に計算してもやはり0号室という部屋も存在しているようだ。

青年は素っ気無い紹介も気にすることなく、はい、俺はエドアルド・ニツカーですけどー？ と眠たげな間の抜けた返事をした。しかし目を凝らすように細めて、ようやくジュリアの斜め後ろ辺りにいる俺に気付いたようだった。

「えー？ 何さ、その子。…ん？ …人間？ ……ハハツ、まさかね。っーか俺、鼻弱いからにおいじゃ分かんないんだよな。」

はて？ というように首を傾げ、鼻先をくいつと指で擦ると、こっちにやって来る。ぺたぺたと平べったい靴が足音を立てて、エドアルド…と呼ばれていた青年が目を丸くして俺を見る。にこにこ笑っていた顔がふつと真面目に引き締まって、じつと推し量るように難しそうな顔をした。近くで見ると思いの外、鋭く射るような強烈な光が見えるその青い瞳に、愛想笑いを硬く浮かべている俺の顔が見えた気がした。

「見たことのない顔だなあ。……新しい人？」

ふつと俺から視線を逸らしてジュリアに問う。

俺の隣で、ジュリアが何だか分からないが、嫌な予感がする笑みを浮かべたのが横目に見えた…。そう感じた俺が咄嗟に口を開けるよりも先に、ジュリアが俺の手を強く引き、一瞬、丹ちゃんは黙ってなさい、というような視線をこっちに向けた。だがその瞳が、途轍もなく面白そうに光っているのを見て、俺は何だかひやりとした。

ジュリアは勿体ぶるように笑みを深め、上から見下ろすようにエ

ドアルドを見た。そしてわざとらしく口を開く。

「ああ、そっか、エドは知らなかったっけ。」

そう言って一度口を閉じ、ふっと俺を見て、横目でエドアルドをちらっと見る。

エドアルドはきょとんとしながら、密かにほくそ笑むような（いや、正しく言えば見せつけるように嫌らしい笑みを浮かべてるようだが）ジュリアを見て、えゝなになに、俺に隠し事？ とおかしく言って口角を持ち上げる（ふうっと腰に手を当てて小首を傾げる仕草だつて、エドアルドがやれば様になる）。

ジュリアは突然俺の肩に腕を回してぐいと抱き寄せると（どわっ？！ と中途半端に開いていた俺の口から奇声が漏れる。ジュリアは何でも突然だから困るんだ。美人とこんな密着する羽目になった俺は急に恥ずかしさで眩暈がした）、エドアルドから遠ざかるように少し後ろへ下がって、にやにやと笑みを浮かべる。

そして声高々にこう宣言した——…するとその言葉で、ジュリアの赤毛がふわりと鼻先を撥って俺の頬が熱くなつた感覚も眩暈も何もかもが吹っ飛んだ。

「この子は神前丹ちゃん。正真正銘、人間だけど、真咲の——
…そうね、フィアンセみたいなのだわね！」

「……はあッ?!」

見事に被った。俺とエドアルドの反応が。

とにかく天井を突き破るかのように、上擦った声が口から飛び出た。その後もキンキンとホールに響いた。

ファイ…ファイア、ンセ……?

聞き慣れない言葉どころか、どこをどう考えてその単語が出てくるのか、全くもって疑問に思っものである。

ぎょつとした顔でジュリアを見る俺と、同じくぎょつとしたまま大口を開けてジュリアと俺とを交互に見るエドアルドに、ジュリアはのほほんと笑いながら、だから手を出しちゃダメよ? 丹ちゃんに何かあつたら、それこそ串刺しになっても仕方ないわよ〜などと訳の分からないふざけたことを言っている。

俺は呆然としたまま、間抜けな顔でジュリアを見上げていた(生憎なことに、隣に並んで立ってやっとなかったが、俺よりも彼女の方が背が高かった……)。だがケラケラ笑うジュリアは、何かを感じ取ったように突然ピタッと笑いのを止めて、あらやだ、冗談が過ぎたかしら…でも別に半分は真実みたいなものだし、ねえ……なんて言いながらも口元を引き攣らせた。不思議に思ってその視線を追って見れば——…冷や汗を垂らしながら、俺はすぐさまジュリアに視線を戻した。

「ちょちょ…ちょつとジュリア、何でこんな雰囲気になってんだよ

ッ？ 何かめちゃくちゃあの人怒ってない？ こっち睨んでない？」

見てはいけないものを見た気がした…。どうしよう夢に出そう…！

「いやいやいや、彼は決して私を睨んではない。丹ちゃんがそう思うのだとすれば、きっとそうね、彼は丹ちゃんを睨んでるんだわ。恐ろしい目付きね。」

「はあ？！ なにそれ！」

「恠気よ恠気。」

「リンキ？」

「嫉妬してんのよ。あーもー、男の嫉妬は見苦しいわねー。」

「誰の所為だよ！」

ジュリアと顔を近付けて小声で言葉を交わしながら、俺はふと、あれ？ と思った。……リンキ、りんき…恠気、…嫉妬してる？ どういうことだよ？ つーか、エドアルド？ 嫉妬？ エドアルドはジュリアの嘘に怒って、……嘘？ ジュリアは何て言ったっけ？

青褪めた俺を見兼ねて、ジュリアが口を開く。

「だーから、エドは、」

「——…ッつーか何で俺と真咲さんが?! ファイアンセ?!」

ぱつとジュリアの腕を振りほどいて彼女を見上げる。ジュリアは急なことに驚いたようにパチパチと瞬きをして、……え、違うの? とケロツと言った。だあぁーッどう考えたらそうなるんだよ?! 俺が女だったとしても釣り合わねえよッ! いや、そもそも俺も男だし?!

「ちよつとちよつと、そんな怒らなくてもいいじゃない。だから冗談が過ぎたって言うてるのにい。」

「冗談って……俺なんかなんて言ったら真咲さんに対して失礼だろッ!」

両手を握り締めたまま熱り立ってそう叫ぶように言えば、ジュリアは……? と固まった。

……誰も口を開かないので、しんと何だか居心地の悪い沈黙が流れる。窓や扉の隙間ともどこからともなく入って来る明け方の冷えた空気に俺は少し冷静になって、は? と顔を上げ、ジュリアを見

た。ジュリアは何だか遠くを見るような目付きで、心なし同情するような眼差しを宙に向けている。…はあ、と溜息をついて何か呟いたようだが、それは俺には聞こえなかった。

顰め面のまま、だけど先程よりかは大分穏やかな表情になったエドアルドは、腰に当てていた片手を今度は自分の顎を支えるように当てて、ふうんと頷いた。そして長い人差し指をぴんと伸ばして、その先が俺を真っ直ぐに指示す。

「えーっと…？　じゃあ何、その人間は、…ジュリア、お前の勘違いじゃん？」

「…ッそうそう、そうですよ、えーとエドアルド…さん？」

何だかよく分からないが丸く収まりそうな気配に慌てて答えれば、エドアルドはなあんだ、とどこか安心したように力無く肩を竦める。そして疲れたような表情を一変させ、そっかそっか…あ、俺のことはエドって呼んでくれよ、とにやにや人懐こい笑顔を浮かべて手を差し出した。

「ここに人間が来るなんて珍しいみたいだけど、俺もここ来たのつい最近だし？　もともと別に人間とかヴァンパイアとか関係無しに暮らしてっからな。…仲良くしようぜ、丹！」

よろしく、と差し出された手を取れば、ぎゅっと握った腕をぶんぶん上下に振って（それがまた馬鹿力…）離すと、次はパンパンと

音が鳴るくらい肩を叩かれた。何だか横に吹っ飛びそうなくらいに感じたが、それでもエドはにこにこ快闊に笑っている。その笑顔はからりと晴れた太陽のように明るく調子の良いものだが、それは全く嫌味のないものだった。

「ちょっとー、何であんたまでついて来るのよ。」

「丹と友情を深める為？」

「あんたがいると面倒なことになるのよね。ホントもう…。」

「ばか、男同士の方が話しやすい事柄つてのもあるんだぜ。そもそも男にはな、お前みたいな無神経な女には到底分かり得ないデリケートな面があるのだから。丁重に扱ってくれたまえ。」

「誰が無神経ですつてえ?!」

俺を間に挟み、ジュリアはエドを睨み付け(…これも見てはならない形相である)、しかし俺の左側を歩くエドは気にすることなく前を向いたまま陽気にカラカラ笑い、俺の肩に腕を回してぐいぐい横に揺らす。何かもう、この2人に挟まれた時点で疲れてんだけど俺……何しに来たんだっけ…。

黙ったままの俺を無視し、ジュリアとエドで何かしら言い合いをしながら、そのまま3人、横に並んで食堂へと入っていった。

「ちょっとエド、私は丹ちゃんに用事があるんだからいきなり割り

込んで来ないでよね。折角明け方のこの時間帯を狙ったのに、…な
あんで一番うるさい奴が起きてるのよ。……」

廊下が薄暗かった所為か、照明に照らされた食堂は異様に明るく
感じられた。暗い中で一瞬だけパツとスポットライトを浴びたみた
いに目が眩んだが、すぐにその清潔な白い明るさにも慣れて、よう
やく俺の体もこの夜が明けきらない朝に活動を始めた感じがした。
そう思ったら何だか腹が空いて、温かいものが飲みたくなった。は
あゝと溜息をつく。

「はーん、『俺達』には聞かせたくない話か？」

エドが何か気付いた風に眉を持ち上げ、鋭い眼差しをジュリアに
向けて立ち止まり、それに冷やかに返すジュリアも立ち止まる。

「別に？ でも、まあね、馬鹿な純血共に食われない為に忠告を
思っただけよ。」

何だか、ジュリアの言葉にはあからさまな嫌悪が含まれている。

「もうどうでもいいからさ、俺何か飲みたいんだけど――……」

ジュリアとエドの間を擦り抜けてふつと奥のカウンターを見れば、どうやらこの食堂には先客がいたようだ。

カウンターのすぐ手前の位置にあるテーブル一角を占領しているその人は、あちこちに白いプリント……いや、何やらびっしりと黒い文字で埋め尽くされている書類を広げながら、その真中で熱心に何かを書き込んでいる。そしてはつとペンを持った手を止めて、黒く長い髪を無造作に掻き上げてこちらを見た。モスグリーンの落ち着いたフレームの眼鏡を、くつと鼻の上に押し戻す。彼女は俺と、後ろの方にいるジュリアの姿を見付けて、ああ……やっと来た、と吐息をついた。

「永沢……ごめんね、さっきこのうるさい子に会っちゃって。」

はあつと大きく肩を竦める仕草をしたジュリアがエドを押し退けて近くにやって来る。エドが後ろの方で何さ！ と憤慨しながら、ぐちゃぐちゃに乱れた金髪を整え直していた。おそらくジュリアに何かされたに違いない。でもその怒り方は子供みたいに頬を膨らませてぶんぶんしているだけで、本気で怒っている訳ではなさそうだ。……ふと思うのだが、エドとジュリアでは、ジュリアの方が年上なのだろうか。こうして見ていると、エドが圧されていて、力関係はジュリアの方が上な気がする……。

「別に構わないけど。……神前くんも、こんな時間から起こされて眠たいでしょう？」

「え、ああ、いえ、……」

「ココアでも淹れてあげようか。」

永沢？ ……と呼ばれたその女性は少し低めの声でそう言う（しかし優しい目元は眼鏡の奥で柔らかく細まった）、長い髪を靡かせてカウンターの奥に入って行ってしまった。そのすらつとした黒い影が厨房に消えると、ジュリアがすぐ近くの椅子に腰を下ろしながら、私はコーヒー、と声を張り上げた。……とりあえず俺もその隣へ腰を下ろす。

「丹ちゃん、彼女もダンピールよ。法哲学の助教授やってるの。仕事場で使ってる苗字が永沢だから私はそう呼んでるけれど、本名は知らないわ。ああ見えても日本人じゃないし。」

ペラペラペラと水のように流れるジュリアの言葉に、はあ、とかへえーとか相槌を打っていたが、どここの大学か聞いて、某国立大の名前が返ってきた時は驚いた。俺の隣に割り込んできたエドがぼけっとながら、へえーその大学ってそんな凄いの？ なんて首を傾げていた。そうそう、そんなに凄いとこなんだよ。

「ジュリア、そんな紹介する為に連れて来たんじゃないでしょう？」

ふつと背後から落ち付いた声色が降ってきたかと思えば、さつと目の前に湯気の立つ温かなマグカップが置かれ、エドの前にも俺と同じくココア色が渦巻くカップが置かれた。永沢さんは最後にジュリアにカップを手渡す。

「うん、そうなのよ。……丹ちゃん、それを。」

ジュリアはコーヒーを啜りながら、自分の席に戻った永沢さんに目配せして、1枚のプリントを渡させた。そこには、同じくらしい大きさの長方形がいくつも並び、……——この赤羽館の間取り図のようなものが描いてあった。

永沢さんはそれを手渡すとさつさと自分の作業に戻った（ちらつと見たところ、担当しているゼミで使う資料か、課題用のプリントかなにかを制作しているみたいだった。分野が法哲学とか言っていたから、俺には全然分からないものだが）。エドは椅子を寄せ、テーブルに肘をついてこちらに身を乗り出すようにして紙を覗き込んでいる。

「大体この辺りは案内してもらったと思うけど、1階のこっちの方は一人で行かない方がいいわよ。特に夜はダメ。」

ジュリアが赤く飾られた爪の先を紙の上につーっと滑らせて、丁寧に描かれた廊下の部分を縦に断ち切るように跡をつけた。確かに主要な部屋は案内してもらったが、こっちの方は行ったこともないほとんどは鍵が掛かっていて、入りたくても入れないのだから。：何があるのか興味はあるけれど、ジュリアが真剣な眼差しで言うからますます興味をそそられたけれど、疑うようにこちらを見ているので、俺はうんうんと首を縦に振って慌てて頷いた。

ジュリアが顔を上げ、永沢さんからペンを受け取ると、間取り図に何やら書き込みをした。

「丹ちゃんの部屋は2階の11号室、ここよ。それで……えーっと、そうね、エドの部屋は0号室だから端っこのここ。永沢は5号室だから、ここ。」

そう言いながら、サラサラと各部屋の部分に名前を記入していく。細く丸っこい文字が、2階部分の何部屋かを埋めた。名前を書いているジュリアの横で間取り図を覗きながら、ミツの部屋が8号室で、レイの部屋が7号室で、千草マイの部屋が2号室であることを知った。

なんだ、みんな同じ2階だったんだ。ジュリアは俺が知り合った人物の部屋を書き込んでくれているみたいで、彼女自身は3階の18号室の部分に自分のサインをしていた。

「へえ……ああ、この『Ley』ってさ、あのおっかない奴だろ？」

エドも初めて知るように間取り図を見下ろしながら呟いた。何を思い出したのか知らないが、うげーと綺麗に整った顔を歪めてるので、ちよつと笑ってしまった。

「うーん、まあこんなものね。あと……真咲の部屋は13号室よ、丹ちゃん。」

Vla……と書き掛けたそれを二重線で消すと、ジュリアは『Masaki』と上の方に書き直した。

間取り図を見ながら、やはり大体2階と3階は同じ造りで、けど3階は行ったことがないなあなんて思う。そう思った俺の心を見透かしたのかどうかは分からないが、ここでもまたジュリアは一つ注意するように俺を見た。

「特にそういうことはないと思うけど、万が一、3階に用事がある時は私か……あと真咲に声を掛けて。もし私も真咲もいなかった時は、絶対、レイに言っつてついて来てもらいなさいね。」

「……え？」

不思議そうに首を傾げた俺に、ジュリアはただただ絶対よ、と確かめる。でもそう言われてもなあ……どういうことだよ？ エドも何だそれ、と言うような顔でジュリアを見遣った。しかしジュリアはただ何か思うように俺を見るだけで、うーん？ と怪訝に返事をした俺に、永沢さんの声が掛かる。

「神前くん、」

「……はい？」

振り向けば、永沢さんは視線を手元の資料に向けながらも話はちやんと聞いていたのか（食堂には他に人もいないし、声を抑えて話してる訳じゃないから普通に聞こえるか）、唇を結んで考えるような表情をすると、動かしていたペンを止めて、真面目そうに光る黒い瞳がこつちを見た。

「現代では生活環境も変わってきているから昔ほどではないけれど、古いヴァンパイアにはその血が急激に強まる時期と弱まる時期があるの。前者ではそういう場合、必ずみんな本能的になるし、後者では大半の力を失うから、弱っていることを周りに気取られないように大分神経を使うみたいね。」

永沢さんはそこでいったん一息つくと、ここで問題なのは……と視線を前に戻した。その横顔は冷静に何かを見据え、何かを捉えるよ

うで、大学で学生相手に教鞭を執るかのようだ。

「その周期が他人には全く分からないこと。つまり、普段からいくら人間に好意的なヴァンパイアでも———人間はただの獲物にしか見えなくなる時だってあるわけ。親しい、信頼し合っている仲でも、ヴァンパイアが人間に危害を加えることはないとは絶対に言い切れない。残念だけどね。」

その言葉に、その見透かすような静かな眼差しに、なぜだか一瞬ぞくつと寒気がした。

永沢さんはさりとそう言つと、俺を横目に見て、隣のエドに視線を移す。

「エドアルドもそうでしょう?」

「…………ツ、…」

エドは表情を変えないまでも、その眼差しは少し緊張するように、そして口元の笑みは硬くなった。微笑んだまま何も言わないが、その沈黙が逆に、触れてはならないという雰囲気を漂わせていた。

俺の右隣に座っているジュリアが既に空になったカップを手で包みながら、そういえば、と言う。

「ダンピールには人間の血が混ざっている所為か何なのか…意外と

バランスが良いのか知らないけれど、そういう不安定なことはないのよね……。大体そういう変化があるヴァンパイアには、一族の血が濃過ぎる所為もあるみたいよ。最近の若い子たちにはあまり聞かないし、時代ごとの環境の変化も関係しているのかもしれないけど……。」

その言葉に永沢さんは興味深いわね、と瞳を煌めかせて頷いた。ただどジュリアはうーんと唇を尖らせるようにして、純血って秘密主義が多いから私達にはよく分からないわよね、と大分投げ遣りに言う。

「そりゃあ俺達にとっちゃ死活問題だからな。ほいほい他人に教えられつかよ。体がうまく利かない時に襲われでもしたら、例え相手が人間だったとしても一溜まりもないんだぜ？」

ここで初めて、エドがにやにやとおかしな笑みを浮かべつつ（それが自嘲的にも挑発的にも見える）、肩を竦めてそう言った。

「あら、そんなに弱っちゃうの？」

ジュリアが意地悪く目を煌めかせ、それならあந்தのそういう時期を探って、その時に打ちのめせばいいのね、とわくわくと言う。ぶちのめすって……、何かジュリアが言うのと洒落になんない。何の恨みか、その内本当に実行しそうな彼女の過激な発言に、俺は苦笑した。野蛮なんだから…嫌ねえ〜とエドもおどけて笑った。

「まあ簡単に言えば、3階に住んでいるヴァンパイアはそういう人たちが多いから、……神前くんは人間だし、一人でそんな所を歩かない方が良いつてことかな。普段何もなくても、実際に何が起るかなんて私達にも分からないから。」

「そうそう、昼間は寝てる奴等が多いから大丈夫だなんて思っても、うっかり廊下で物音立ててごらん。15、16あたりは特にヤバいわよ？」

永沢さんは辞書のような分厚い本を引き寄せてページを捲りながら言う。その言葉に頷いたジュリアはにやっと笑って再びペンを取ると、間取り図を自分の方に引き寄せて、15号室の辺りに太く湾曲した角を持つ山羊のようなものを落書きした。

「15、16？」

何それ、と俺が紙を引き寄せれば、見た通りよ、とジュリアが素っ気無く返した。

：山羊？　：15号室、16号室？　そこって誰が住んでるんだろ。エドに知っているかと問う視線を送れば、彼は、そんなの気にしたこともないなあ、と言うような顔をした。……もともと人間とかヴァンパイアとか関係無く暮らしていたと言っていたけれど、エドはただ他人に関心がないだけにも思える。

ジュリアはもう3階の住人の話に興味を失ったみたいに、飲み終わったコーヒークップを覗き込んでみていた。俺はあと少し残っていた、生温くなったココアを一気に飲み干した。

「ふうん……まあ今の所3階に行くことなんてないと思うけど。」

「つか管理人の真咲さんならともかく、何でレイに頼んなきゃならないんだよ。もし私も真咲もいなかった時は———：そんな風に言ったジュリアの言葉を思い出して疑問に思う。そもそもレイ自身が危険じゃん。実際襲われかけたからね俺。」

「えー？　…丹、今度行ってみない？　どんな奴がいるか見てみたいじゃん。本物が見られるかも。」

「こんな時代にもヴァンパイアらしいヴァンパイアがいるのかな、なんて変なことを言っているエドだが、……それよりも俺は、ヴァンパイアという生き物の不思議な体質？　というか生態？　というか、そういうものの方が興味ある。何を聞いても、結局人間の俺には不可解なことばかりだ。さっきの話も、実はそんなによく解っていない……。血が濃いか薄いとか？　何それ？」

「最近はやさ、純血でも混血でも人間っぽいヴァンパイアばかり増えちゃって、まあこの時代で生活していくには仕方ないんだけどさ、なんつか……会った瞬間に、こう、ゾツとするような奴がいなくなってる気がするんだよな。」

椅子の背凭れに完全に凭れかかって頭の後ろで手を組んで、エドは天井を見上げたまま詰まらなそうにぼやいていた。だが急に何か思い出したみたいにはっと息を呑むと、弾けるようにがばっと体勢を起こす。

「あつ、それでも真咲は凄かった…！俺さ、ここ何十年か色んな国歩き回って日本に来ただけけど、あの出会いは衝撃的だったな…！」

「は…？」

真顔になったエドはテーブルに腕を置いて俺の方を向いて、急に興奮したように話し始めた。その青い瞳は爛々と光って、その視線と気迫に、俺はうえっ？！と押されるようにしてエドから少し離れた。ジュリアの肩にぶつかる。いきなり自分の方へ寄って来た俺に、ジュリアは何よ、とこっちを見た。

い、いや…！なんとも不思議な状況になっていて……。エドに視線を移したジュリアが呆れた表情になった。

「あの時無性に腹減ってて、でも金もなかったし、一人くらいならいいかな？なんて思いながらふらふらしててさ、でもどうせなら見た目も綺麗な人間がいいじゃん？見るからに不健康そうな奴とか不細工な奴とか、絶対そういう奴等の血ってまずくない？まあそうやって物色してたらまさにどストライクな奴がいてさ、ラッキー

って思つて飛び付いたらそれがさ、」

は、腹減つてて…一人くらいならいいかなつて…。

信じられない、というようにまるで異常者を見るような目をしていたのか、ぎよつと目を見張つた俺を見たジュリアがぷつと小さく嘔き出した。そして、だから言つたでしょ？ 純血なんて野蛮な奴らばかりよ、と肩を竦めた。

……っーか血液に不味いも美味いもあるかよ。

エドは一度溜息をつき、遠くを見るような眼差しで、まるで当時の自分を呪うように、はたまた褒め称えるような顔をした。

「はあ…けどまさか同族とは思わなかったな。…」

しかも物凄い隻眼…一瞬で俺の気配を見切つたんだから——
……そうやって呟くように付け足された言葉。その時エドの青い瞳が一瞬、彼には似合わないくらい物静かな暗い色をしたように見えた。

しかしそれも次になればコロツと変わつて、またうつとりするよ
うな色になる。はあ…とまるで女子が甘い溜息をつくみたいに、
ふわふわしてるエドの表情は何かに盲信しているような、正直気色
悪い（顔が良いからまだマシかもだけど）。

「あの凍り付くような冷たい眼差し…！ この世の全てを統べるよ
うな…もうあれ、ゾクゾクしたね！ これだッこれこそ俺が求め
ていた、高貴で狡猾な、冷酷無情な、本物の……！ ホント、久し

振りにそう思ったよ。何も言葉が出なかった。あの目だけで殺されるかと思った…！ 真咲になら殺されてもいいとも思ったよ！」

「……まるでワラキアの、カズィクル・ベイみたいなの？」

突然、ジュリアはひっそりと微笑むように、吐息を零すように素早く囁いた。

大きく目を見開いてジュリアを見たエドが、ドンツとテーブルに拳を打ち付け、ビンゴ！と言うように立ち上がった。その、狂ったように熱弁を振るうエドを眺めていた俺も、えッ…？ とジュリアを見る。カズィクル・ベイって…。

「ッそうそう！ それだ、串刺し公なんて…なんて適当な言葉だ！ それこそ真咲に相応しい！」

どこか恍惚とした眼差しで天を仰ぎ、興奮で打ち震えるエドとは対照的に、ジュリアは彼女が時折見せる不思議なほど冷めた表情をしていた。串刺し公…？ と眉を寄せた俺に、トルコの言葉でカズィクルは串刺し…ベイは君主の意味よ、とジュリアが呟くように言った。

「確か……オスマンの兵士たちがそう呼び始めたと聞いているわ。まあ、言い得て妙ってところかしらね。」

「へ？ オスマン…って、あのオスマン帝国？」

高校の世界史で習ったかどうか、とにかく微妙な記憶だ…。

そんな俺に顔を向けた永沢さんが微笑みながら、神前くんは『歴史』が苦手なの？ と首を傾げた。俺は素直に頷く。中学も高校も、歴史？ 社会？ 公民とか？ …その辺りは毎回テストでヒーヒー言いながらも何とか…ぎりぎりで乗り越えてきたという感じだ。それを想像したのか、永沢さんは困ったようにクスクスと笑った。

「そうなんだ。でもこの住人達は何十年何百年を生活している人が多くてね、…学校で習う歴史なんて実際のもものと比べると間違っているものが多いんだけど、全体的な歴史の流れを知っていて損はないよ？ 話の参考くらいにはなるし。」

「へ、へえ…。」

…歴史、…歴史かぁ。

確かに、俺が学校で習ったような『歴史』と、ジュリアや永沢さん、ミツや真咲さんが言っていたような話とはいくつも食い違っているところがあったな。だから話を聞いていても何が何だか分からず混乱したのだけだ…。

でももし、真咲さんが言っていたようにヴァンパイアと人間が共に生きていた時代があるのなら、…俺達が習った『歴史』の中にも、ヴァンパイアやダンピールの存在が隠されていたってことになるか？ それに一族ごとにそれぞれ異なる国に仕えてたって、そんなことも言ってたよな。…もしかするとオスマンやらローマ帝国や

ら、歴史上有名な戦争にも人間だけじゃなく吸血鬼も関わっていたってこと？ 学校では何年にどこで何があったとか、条約がどうのこうの、それくらいしかやらなかったからなあ……。

永沢さんはちらつと横目にエドを見ると、彼も歴史の勉強が必要みたいね、と俺に向かってこっそりと言った。

「え……？」

「だって、カズイクル・ベイと赤羽真咲が同一人物だなんて知らない人は大体、人間たちが作った夢物語のようなくだらない『歴史』でも、じっくり吟味して事実と照らし合わせていく楽しみを知らない人よ。」

永沢さんはにこりと笑って、まるで呪文のように言った。

「カズイクル・ベイの訳語がツェペシュ。ヴラド・ツェペシュ——
——…ヴラド3世のニックネームだもの。」

もっひとつの忠告

「……みんなの年齢？」

何で？ というように、きょとんとエドが首を傾げる。

こんな時間からたくさん食べて満足したのか（朝っぱらからあの量を食うとは…見てる俺の方が気分悪くなる程だ）、エドは随分暢気な顔をしている——…良くも悪くもジュリアのお陰で俺達は早めの朝食を終えて、食堂を出たところだった（永沢さんはまだ食堂で作業をしてるし、ジュリアもカウンター奥の自分の定位置に着いてばーっとしていた）。

玄関ホールのステンドグラスにきらきらとした朝日が差し込んで、床に青や赤、黄、緑…と淡い色を落としている。さっぱりと綺麗な朝の空気で、その下を何事もなく通るエドは朝日が平気なんだろうかと思ったが、ふんふんと鼻歌混じりに機嫌の良さそうな顔をしている時点で、彼にとって日光なんてものはそれほど重大な問題ではなさそうだ。

そういえば、ヴァンパイアでも人間同様に普通に暮らしてる奴もいるってミツが言っていたっけ。まあその人それぞれってことか。

「だって気になるじゃん。同じくらいかと思ったらエドも年上みただしさ。」

「つか年上も年上…はつきり何歳って聞いた訳じゃないけど、生きている時代が違っつてくらい離れてんじゃない？ 違い過ぎて、もはや呆れるしかない。そんな俺に、エドはそうかあ？ と言いたげな

顔をする。

「俺もまだまだペーペーだし？」

「エドが？」

思わず真正面から指差した俺に、エドは別に嫌な顔をするでもなく、うんと素直に頷いた。エドでペーペー…エドだつて見た目はともかく結構な歳なんじゃない？ それでもペーペー？

「あ、多分勘違いしてると思うから言うけど、人間とヴァンパイアの寿命は当然違うわけだよな？そこは分かるだろ？」

「うん。」

「はつきりは言えないけど、普通のヴァンパイアなら6…7世紀はいくし…何千年つて単位を生きる奴もいる。……俺のじいさんなんかいつから生きてんのか知らないけどさ、今も元気だし、それに比べたら俺なんてまだまだだつてこと。」

そう言って、何か例えを探すように視線を逸らして、ああ、と口を開く。

「ほら、レイっているだろ？ アイツなんて見た感じだけでも……700、800はいつてるんじゃない？」

「み、見た感じ……。」

うんうん、と自分で納得するように頷いているエドだが、見た感じと言われても……。

いやいや、どう見てもそんな風には見えないって。そもそもレイってあの不思議なくらい紅い目が印象的過ぎて全体のイメージが……。しかもあの時の状況が状況だったし、年齢を推測出来るほど観察する余裕なかったし、それこそ俺の命の危機だったからね。

「丹から見たら、俺とか何歳に見えた？」

「え、だから俺と同じくらい。」

「……丹って何歳？」

エドが俺の顔を覗き込むように身を屈めて言う（これでも俺の身長も高い方なだけだなあ！）。

「う、今年で20……になるけど……？」

強い光を放つエドの青い瞳を見上げておずおずと言えば、思った通り、エドはころつと口を開き目を見開き瞬いた。

「…ツアハハハハ！ 俺、そんな若く見える？！ 20？ 『俺達』からしたら赤ん坊みたいなものだけど20って、でも、……うわあ何か嬉しいー！ それじゃあ俺も丹の大学通えちゃう？！ いいなそれ、楽しそうじゃん？！」

………食堂で年齢について指摘した俺にミツが怒った気持ちに分かった気がした。

ケラケラケラと腹を押さえたエドが、俺の視線に気付いてか、歯を食い縛ってそれでも抑え切れずにクツクツと震えるように笑っている。

「おいエド、……」

「悪い悪い。でもさ、年齢なんてあるようで無いようなものだから。特に『俺達』には。」

腰に手を当ててふうつと息を吐いて、それでもダンピールは人間と同じように考えてもらっていいと思うけど、とエドはにやりと付け足した。

「ダンピールの寿命は大体が人間と同じくらいみたいだし。そりゃあ混血だから仕方ないかな。」

へえ…ヴァンパイアとダンピールもやっぱり違うんだ。

「あ、確かミツは22って言ってたな…」

自分でそう言ってたし、それは確かなんだろう。

でも思ったけど、ミツはもともと童顔なんだろう、あれは。例えばヴァンパイアの血が混ざってるっていつてもねえ…。ぷくーと頬を膨らませて怒るミツの顔を思い出して、くすつと笑う。

「ダンピールかあ……それじゃあジュリアは、…」

そう言い掛けてエドを見れば、彼もきつと俺と同じことを考えていたのだろうけれど、透かさずシーツと人差し指を口に当てて、ダメだって！あの女絶対地獄耳だぜ！とひそひそしながらちらっと食堂を振り返った。

まさかこの距離で、とは思っけどミツの例もあった訳だから、ダンピールの聴力には人間の想像を超えるものがあるし……。こんな

こと話してるの聞かれたら絶対恐ろしいことになる…女性の年齢を詮索するなんて男の風上にも置けないわね！と目を吊り上げて怒るジュリアの姿が思い浮かぶようだ。

「……50手前くらいじゃねえ？」

螺旋階段を上って2階について、ようやくエドがうつむと顎に手を当てて考え込んでいた顔を上げた。主語がないので一瞬何のことかと思ったが、さっきの話の流れからしてジュリアの年齢のことだ。エドの真面目に考える顔に、苦笑が漏れる。

「うーん、もうちょっと若いんじゃない？ 流石に50って……」

40後半50手前って……俺からしたら完全にオバサンの位置だよな。そりゃあ中には若々しい人もいるけれど。でもジュリアはそうは見えないし（実際そうだったとしても絶対否定しそう）。

それにしても生活様式といい寿命といい、ダンピールって本当に『人間寄り』なんだな。ヴァンパイアでもなく、かといって完全に人間でもなく、それでも人間に似通っていて……ヴァンパイア的能力も受け継いでいて……。

「ヴァンパイアの血、かぁ。細胞の成長を抑制するとか言ってたからな。……それならもしかすると50代60代でも有り得るかも。」

俺もエド同様難しい顔をしながら呟く。

でもさ、……やっぱ人間と同じに考えたらダメじゃねえの？ ダンピールだって外見と中身が正確に対応してる訳でもなさそうだしさ。人間に比べれば、ヴァンパイアもダンピールも外見と実年齢とのギャップが激しすぎる。永沢さんは精々30代……くらいに思うけど、ジュリアがそれより上っていうのはなあ……。まあ、ジュリアの物怖じしない堂々たる態度を見ていると20代の若者には見えないうのも確かだが（あの自分勝手に物事を押し進めてしまっただけとか？ あの強引さとか？）。

「そうそう。女は化け物だぜ？ それに混血なんて、人間より性質悪イ……。」

部屋の位置が真逆なので廊下に立ち止まって話をしていた俺達だが、エドはそう言っただけ、一瞬苦虫を噛み潰したような顔をした。そして廊下の壁紙をじっと睨み付けながら、ふっと手摺に寄って吹き抜けのホールの下へ視線を移す。どこからともなく入り込む風が、下から上へ吹いて来る……。

明るいホールを見下ろしながら、エドはククツと肩を揺らして笑った。

「丹、」

「ん？」

エドの飄々とした瞳が俺を見る。

しかしその色は鋭く、強烈な光を帯びている。俺に向ける視線をふっと和らげて、だけど少し低く硬い声で（もしかするとそれがエドの本当の声なのかもしれない…）口を開く。

「あの女、そう簡単に信用するなよ——…」

「エド…それ、どういっ…」

信用するなって…ジュリアのことかよ？

眉を顰めてじっと見れば、エドはすっと目を細くして（微笑んでいるように見える）、俺の部屋とは反対側の廊下へ歩き出した。ペタンというエドの平たい靴の音が、絨毯に吸収されて消える……。

エドは金髪を掻き回して、背中を向けたままちらっと顔だけ振り

向いた。その顔はにやにやふざけた笑いを浮かべている訳でなく、本当に、親切から言っているような静かな顔をしていた。ふつと上を見て、視線を落とす。するとそれと同じように、長い睫毛が頬に影を落とす。

「あの顔、裏表があるってこと。…俺からのチューコクですよ、丹くん。」

ちらともう一度こつちを見て、眉を持ち上げ、口角を少しだけ持ち上げて（その横顔はどこか優しさもあって、引き締まった顔付きが遅しくもあった）、しかしすぐに、油断すんなよー特にお前なんてばくつと一呑みにされちゃうぜ？ とにやにやからかうような声で言う。

「なっ…？」

そして大口を開けて欠伸をしながら、ひらっひらっ と片手を振って自分の部屋に帰ってしまった。

「何だよそれ。…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497x/>

赤羽館

2011年10月20日04時15分発行